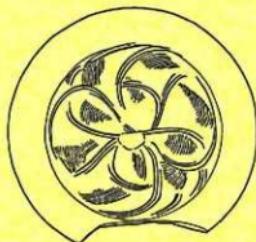


# じょうべのま進跡

— C・K 地区の調査 —



1985年3月

入善町教育委員会

題字：右井正雄氏

# じょうべのま進跡

— C・K 地区の調査 —

1985年3月

入善町教育委員会



遺跡全景



中國製磁器

# 序

じょうべのま遺跡は、昭和45年以来数次にわたる発掘調査が実施され、その性格と重要性が明らかにされてまいりました。そして昭和54年5月14日には、国の史跡指定を受け、古代の代表的な庄園遺跡として、こんにちでは全国的な評価を受けているところであります。

一方、建設省の護岸工事に伴い、指定地に隣接する副堤用地内の発掘調査を昭和52年以来実施し、じょうべのま遺跡の全容を把握するうえで欠かせない多大の成果をあげております。本書は、その副堤敷地内、C・K地区の発掘調査の総まとめとして発刊するものであります。

その間、多大のご尽力を賜わりました富山県埋蔵文化財センター及び地元関係者に対し厚くお礼申し上げますとともに、調査に格別のご理解を示されました建設省黒部工事事務所に深く敬意を表するものであります。

昭和60年3月

入善町教育委員会

教育長 森 栄

# 例　　言

1. 本書は、富山県入善町田中に所在するじょうべのま遺跡C・K地区の発掘調査報告書である。
2. 調査は海岸保全事業副墳工事に伴い、建設省北陸地方建設局から委託を受けて、入善町教育委員会が、昭和52年度から昭和58年度まで実施した。なお、遺物整理と報告書の刊行は、昭和59年度に行なった。
3. 調査にあたっては、事務局を入善町教育委員会社会教育課におき、富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けた。調査年度と調査担当者は次のとおりである。

昭和52年度 富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事岸本雅敏

昭和53年度　〃　〃　〃

昭和56年度　〃　主任岸本雅敏・文化財保護主事山本正敏・松島吉信

昭和57年度　〃　文化財保護主事狩野　睦・松島吉信

昭和58年度　〃　〃　池野正男・神保孝造・松島吉信

4. 調査の参加者は次のとおりである。

田中久栄	田中三正	久郷常平	大丸久仁	島　浩文	柳平憲二	須田良平	竹島タカ
田中静子	田中テル子	田中正子	前川信子	込尾寿子	室　メイ	住久よしゑ	柏原信子
中瀬楓子	北尾真穂子	鈴木タカ子	吉島澄子	田中民子	島　明子	大角ハツエ	舟川のぶ
田中君子	北尾久子	松原京子	宮本恵美子	坂東房子	飛田みつゑ	西尾カオル	上野スミ
舟川かほる	松波花子	田中みつゑ	田中澄子	田中静城	室　セツ子	室　フサ	田中トシ子
田中てる	田中キヨ子	田中キヨ	上野すみ子	村田容子	田中ふじゑ	竹島ハナ	池田クサ
上原ハツエ	三島数枝	池田ヤヨ	柳平ヤイ	上原ユリエ	上原ミヨ		

5. 発掘調査から本書の作成にいたるまで、下記の方々から貴重な御教示を賜った。また、地元田中久栄氏には連絡所及び飲料水の提供を受けた。厚く御礼申し上げる。

奥田新作・奥田淳爾・龍瀬良明・近藤義郎・竹内俊一・舟崎久雄・宮田進一・吉岡康暢

(敬称略・五十音順)

6. 本書の編集・執筆は、岸本雅敏・山本正敏・松島吉信が行ない、文責は各文末に記した。

# 目 次

I 遺跡の位置.....	1
II 調査の概要.....	3
1. 既往の調査と調査地区.....	3
2. 調査の契機と調査経過.....	5
III 遺構.....	6
1. 捩立柱建物.....	6
2. 構.....	6
3. 川・溝.....	8
4. 土坑.....	8
IV 遺物.....	11
1. 古墳時代.....	11
2. 平安時代.....	11
3. 中世.....	18
4. 近世.....	24
5. その他の遺物.....	25
V 調査の成果.....	27
1. 古代景観の復原.....	27
2. じょうべのま遺跡における土器製塙.....	31
3. 中世の遺物について.....	37
4. 遺構について.....	43
参考文献.....	45

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置	2	第14図 珠洲系陶器実測図	21
第2図 地区割と発掘位置	4	第15図 珠洲系陶器実測図	22
第3図 調査風景	5	第16図 土師質皿実測図	23
第4図 建物群実測図	7	第17図 近世の陶磁器実測図	24
第5図 遺構全体図	9	第18図 木製品・砥石実測図	26
第6図 川跡(SD 049)断面・土層図	10	第19図 黒部川崩壊地の微地形	31
第7図 古墳時代の土器実測図	11	第20図 富山県製塙土器出土遺跡分布図	34
第8図 平安時代の土器実測図	13	第21図 棒状尖底製塙土器の系統と分布	35
第9図 平安時代の土器実測図・拓影	14	第22図 型式別にみた製塙土器の分布	36
第10図 平安時代の土器実測図	15	第23図 朝日町柳田遺跡出土の中国製磁器	38
第11図 土鍋実測図	16	第24図 陶磁器の時期区分	40
第12図 製塙土器実測図	17	第25図 陶磁器組成	42
第13図 中世の陶磁器実測図	19	第26図 平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物面積	44

## 図版目次

巻首原色図版 上 遺跡全景	図版11 須恵器・土師器
下 中国製磁器	図版12 須恵器
図版1 遺構実測図	図版13 須恵器・土師器
図版2 遺構実測図	図版14 黒色土器・土鍋
図版3 遺構実測図	図版15 棒状尖底製塙土器・平底製塙土器・土製支脚
図版4 遺構実測図	図版16 珠洲系陶器・土師質土器
図版5 C地区全景・C地区トレンチ	図版17 中国製磁器
図版6 C地区全景・C地区溝	図版18 珠洲系陶器甕・鉢
図版7 C地区掘立柱建物群	図版19 土師質土器・漸戸・砥石
図版8 C地区川跡	図版20 近世陶磁器
図版9 K地区全景	図版21 木製品
図版10 K地区溝・C地区全景	

## 表目次

第1表 既往の調査一覧	3	第3表 建物・柵一覧	43
第2表 富山県製塙土器出土遺跡地名表	34		

# I 遺跡の位置と環境

## 地理的景観

黒部川扇状地は北アルプスに源を発する一級河川の黒部川によって形成された、典型的な沖積扇状地である。上流には昭和38年に完成をみた関西電力黒部川第四発電所をはじめとして、多くの水力発電所が設置されており、急流河川の特徴を生かした開発がおこなわれている。

現在の黒部川は扇状地内の西側に1本の流路として日本海へそそぎこんでいるが、古くは「黒部四十八ヶ瀬」の名が語るように、扇状地内を本流と支流が網目状に流れている。源流から海岸線までわずか60キロメートルであり、3,000メートル級の山々から流れでた河水は、宇奈月町愛本付近を扇頂として見事な扇状地を形成している。この扇状地は大きく3枚の段丘面に区分される。最も古い高位の段丘面は右岸で棚山丘陵と、左岸で十二貢野台地と呼ばれている。後者の黒部市山田遺跡では澧飛流紋岩製の石刃が検出されており〔桜井1983〕、旧石器時代の遺跡がさらに存在するものと考えられる。旧扇状地と呼ばれる低位段丘は右岸に著しい発達がみられ、舟見野扇状地とも呼称されている。現在ではほ場整備と農業用水の設置により、一面が水田地帯となっているものの、近世までは「雲雀野」と呼ばれた荒地であった。最も新しい時期に形成された通称新扇状地は、面積の上で、黒部川扇状地の約8割を占める。この大半は水稻単作地帯として利用され、単位面積あたりの米の収穫量は全国のトップクラスに位置づけられている。水利に不都合な扇状地という地形的制約にもかかわらず、近年の流水客土・ほ場整備・適切な農業技術の導入などを要因として、収穫量の増加が説明されている〔範瀬1982〕。

扇端部は「杉沢」と呼ばれるスギを主体とした小規模な湿地性の林の散在で特色づける。近年のほ場整備により大多数が消滅してしまっており、柳原地区に国指定の天然記念物として約27,000m<sup>2</sup>が保存されているにすぎない。立地条件は扇端部の湧水と密接な関係があるとされており、吉原沖の「沈水林」や魚津の埋没林などに初発的な形態を求める考え方がある。

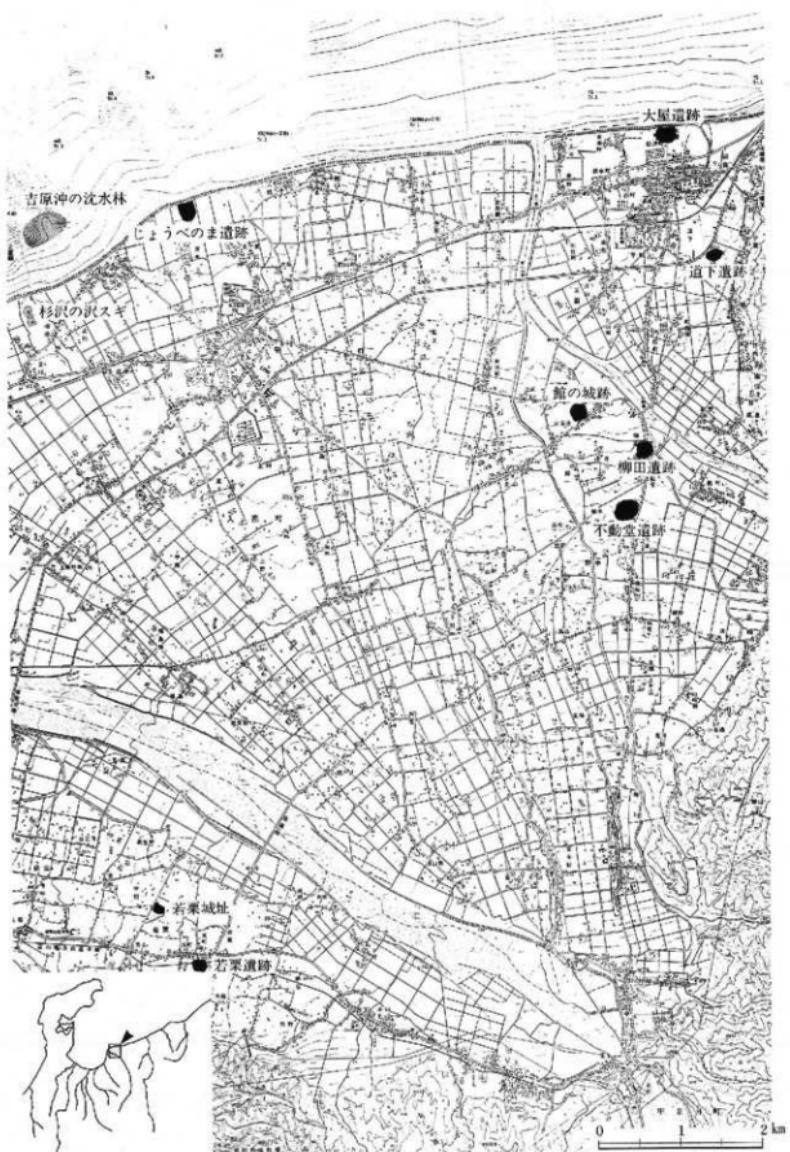
## 歴史的景観

最も古い段丘面には前述の山田遺跡があり、旧石器時代の石器が検出されている。低位段丘面には縄文時代の遺跡が多く分布する。右岸の舟見野扇状地には国指定の史跡である不動堂遺跡をはじめとして、愛本新遺跡・下山新遺跡・柳田遺跡などがある。左岸の段丘上には浦山寺藏遺跡・下立遺跡・前沢遺跡などが存在し、沖積面である新扇状地上でも前沢遺跡などの縄文時代の遺跡が確認されている。

奈良・平安に、北陸地方では中央の有力寺院が保持した多くの庄園が設置されている。このうち新川郡には東大寺領の丈部庄と大蔵庄、西大寺領の佐味庄が設けられた。これらの庄園の現地比定については諸説が公表されており、見解の一致をみていない。また、東大寺領の二つの庄園が10世紀末にことごとく荒廃している状況を史料に窺うことができる。該期の遺跡としてはじょうべのま遺跡をはじめとして朝日町大屋遺跡・道下遺跡などが確認されている。道下遺跡では平安時代中期の土師器・須恵器・製塩土器といった遺物と掘立柱建物の柱穴が検出されている〔橋本他1984〕。

中世に属する遺跡としては前述のじょうべのま遺跡・道下遺跡に加えて境八遺跡・柳田遺跡・若狭城址・袖野遺跡などがあり、珠洲や輸入陶磁器が検出されている。12世紀には東大寺領人著庄が成立したもの、13世紀までは存続せず、黒部川の洪水のために荒廃した様子を文献史料で追うことができる〔奥田1977〕。

(松島吉信)



第1図 遺跡の位置

## II 調査の概要

### 1. 既往の調査と調査地区

じょうべのま遺跡の発見は、古く昭和16年ごろにさかのほる。昭和45年には、は場整備を契機として最初の発掘調査の紙が入れられ、爾来、毎年のように調査が実施され、こんにちに至っている（第1表）。

#### (1) 庄家跡の調査

昭和45年の最初の調査は、この遺跡の中心部ともいべきA・B地区を対象として行い、掘立柱建物群の一部を検出した。翌昭和46年には、奈良国立文化財研究所の指導をえて、L～R地区の予備調査をへてA・B地区の面的な発掘調査を実施し、コの字形の配置をもつ掘立柱建物群の全容をほぼ明らかにした。建物群のあり方と出土した木簡や「西庄」銘をもつ墨書き土器の検討から、これらの遺構を平安時代前期の庄園の庄家跡と推定した。昭和49年の第5次調査では、国の史跡指定に向けてひきつづきこの庄家跡地区的調査を行い、新たに掘立柱建物群を検出するとともに、「上白木五斗」と墨書きした木簡が出土した。こうしてA～H地区については、全国的にも数少ない初期庄園の庄家跡として、昭和54年5月に国の史跡指定を受けた。

一方、第3・4次調査の対象としたS地区では、平安時代末から鎌倉時代初期にかかる掘立柱建物群を検出し、多数の中国製磁器・珠洲・上野質土器が出土した。このL地区については、中世の東大寺領入善庄との関連性が考えられている。

#### (2) 護岸堤建設に伴う調査

じょうべのま遺跡の北端は日本海に面している。この地区を含めた下新川海岸は全国有数の海岸侵食地帯であることから、建設省では海岸保全のための護岸堤・防波堤の建設計画を策定した。その施工に先立ち、昭和52・53年には、遺跡の北端と考えられたS地区北半部の試掘調査を実施した。しかし遺構・遺物はなんら発見されなかつたので、遺跡はこの地区まで広がっていないものと判断された。

ついで昭和55年には、東接するC・K地区の試掘調査を行い、柱穴や溝を確認した。調査結果にもとづきC地区の保護指図について建設省と協議を重ねたが、海岸侵食の激しいこの地域では遺跡全体の保護上からも護岸堤は不可欠と考えられ、その記録保存もやむをえないと判断した。昭和56年にはC地区の調査を実施し、川跡をはじめ鎌倉時代前期の掘立柱建物群を検出した。昭和57年にはK地区の試掘調査を再度行い、翌58年にはその記録保存調査を実施した。こうして護岸堤建設に伴う一連の調査をすべて完了した。

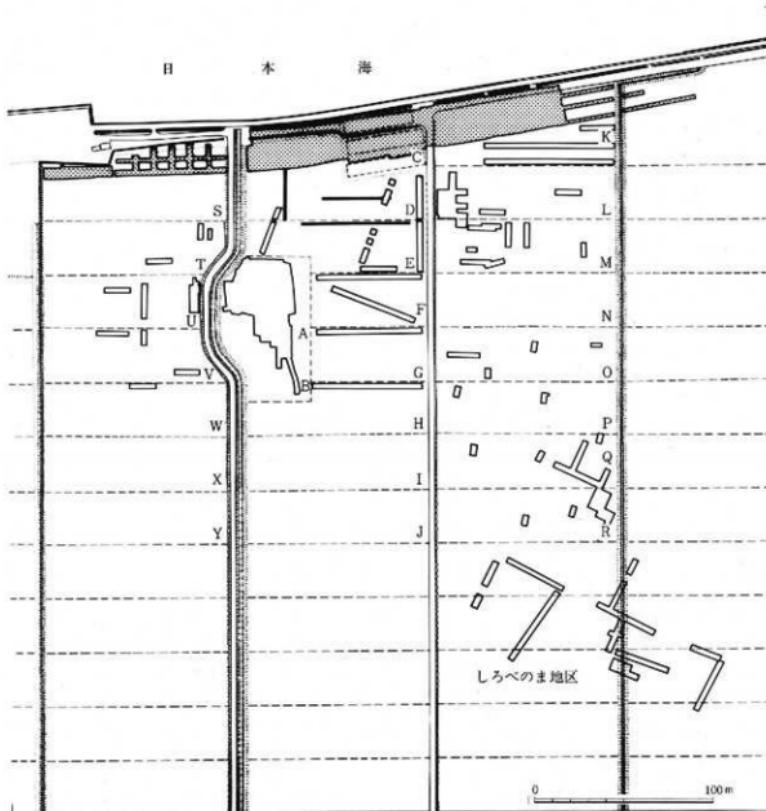
第1表 既往の調査一覧

調査年次	調査期間	調査地区	調査報告	備考
第1次	昭45.6～20～6・21	A・B		
第2次	昭45.7・29～7・31	A・B	〔竹内1971〕	庄家跡地区
第3次				
第1期	昭46.4・17～4・20	L～R		
第2期	昭46.7・15～7・23	L～R		
第3期	昭46.10・10～11・16	A・B・D・E・F	〔高島1972〕	庄家跡中心部全幅
第4次				
第1期	昭47.4・17～5・4	じょうべのま		トレンチ
第2期	昭47.9・25～11・19	L～O, T～W	〔高島1973〕	
第3期	昭48.3・14～3・21	M・O・L	以上(高島ほか1974)	
第5次	昭49.10・10～12・7	A・H・U	〔橋本・岸本1975〕	庄家跡南側
(試掘)	昭52.7・14～7・19	S	〔岸本1978b〕	耐震部分確認調査
(試掘)	昭53.8・19～8・31	S	〔岸本1979〕	" "
(試掘)	昭55.10・16～11・10	C・K	〔神保・奥村1981〕	" "
第6次	昭56.9・16～11・18	C	〔岸本・岸本1982〕	記録保存調査
(試掘)	昭57.9・27～10・19	K	〔松島1983〕	確認調査
第7次				
第1期	昭58.7・18～9・3	K	〔本書〕	記録保存調査
第2期	昭58.7・21～8・5	D～H	〔舟崎1983〕	国指定地内トレンチ
第8次	昭59.7・25～9・8	D・K・F・H	〔舟崎1985〕	国指定地内

### (3) 史跡の環境整備に伴う調査

昭和54年5月に国の史跡指定を受けたA～H地区（C地区を除く）については、昭和55・56年度の二か年にわたって土地の公有地化を実現した。そして昭和57年には、町単独による史跡の環境整備事業を策定し、同年10月には、関係行政機関・学識経験者・地元代表者からなる「じょうべのま遺跡整備計画策定委員会」を発足させた。また昭和59年度以降は、3か年の計画で国庫補助金の交付を受けた環境整備事業をひきつづき策定し、現在に至っている。

こうした環境整備事業の一環として、昭和58年夏には、庄家跡（A・B地区）に比べて調査が不十分であったD～H区の試掘調査を実施した。この調査で、往時、庄家跡の東を流れていた川跡の流路をほぼ確認した。昭和59年にも同じくD・E・F・H区の試掘調査を行い、川跡の東側で建物群を検出した。（岸本雅敏）



第2図 地区割と発掘位置 (1/2,500)

## 2. 調査の契機と調査経過

下新川海岸の侵食に対する対策工事の歴史は明治時代までさかのぼることができる。近年における加速度的な汀線の後退への対応として、昭和35年に建設省の直轄事業となり、大規模な護岸堤等の建設が開始されている。工法は直立堤、離岸堤、消波工、副堤へと変遷し、從来の線的な工事から面的な工事へ移行している。

じょうべのま遺跡が所在する田中地区で副堤建設が開始されたのは昭和52年度からである。工事に先立ち入善町教育委員会では遺跡の広がりを確認するための予備調査を実施した。

昭和52・53年度はS地区の北半部を対象とし、各々4日間・10日間の延日数で、500m<sup>2</sup>・421m<sup>2</sup>の面積の試掘を実施している〔岸本1977・1978〕。その結果、遺構や遺物などが検出されず、この地区まで遺跡が広がっていないことを確認した。

昭和55年度は国の指定地域の北側に位置するC地区を対象として試掘調査を実施した。延べ8日間の日数で745m<sup>2</sup>の面積を調査し、掘立柱建物の柱穴・溝状遺構・旧河川などの存在を確認した〔神保他1981〕。同時に、鶏舎移転予定地であったK地区的約500m<sup>2</sup>の試掘調査も実施され、溝状遺構や土師器・須恵器・珠貝などの遺物を検出している。

昭和56年度には上述の成果をうけてC地区の約2,400m<sup>2</sup>について記録保存調査を実施した〔岸本他1982〕。調査期間は9月28日から11月18日までであり、延べ34日間の日数であった。表土除去のために重機を使用し、ひきつづき包含層はベルトコンベアを並列して掘り進めた。地山の黄褐色砂質土で遺構の確認を行ない、発掘区のはば中央部で南北方向の旧河川を、東側で柱穴群を検出した。旧河川は表土から約2mもの深さで川底の砂礫層へ到り、11月10日によく掘り上げが完了した。東側の柱穴群については造り方測量を実施した。なお、10月24日に地元住民を対象とした現地説明会を実施し、盛況であった。

昭和57年度はK地区を対象として試掘調査を実施した〔松島1983〕。延べ15日間の日数で約700m<sup>2</sup>の調査を行なった。調査区の西端で前年度に確認をした比較的小規模な旧河川の右岸を検出し、柱穴群と溝状遺構も確認した。さらに、K地区的東側に位置する水田部分をも調査したが、遺構や遺物は検出されず、遺跡の東側への広がりはほぼK地区で終了することが判明した。

翌昭和58年の7月18日から9月3日まで延べ30日間の日数で、K地区的記録保存調査を実施した。上述の試掘によって確認された約2,000m<sup>2</sup>の面積を対象とし、旧河川の掘り下げと柱穴群の検出を行なった。調査方法は昭和56年度と同様に重機とベルトコンベアを併用した。柱穴群はまとまりのない散漫な分布状況を呈し、L地区で確認された中世に属する掘立柱建物の北端部分にあたることを確認した。 (松島吉信)



第3図 調査風景（左C地区、右K地区）

### III 遺構

C・K地区の調査で検出された遺構は、掘立柱建物・柵・川跡・溝・土坑である。これらの遺構の分布状況は次のとおりである。まずC地区西側の微高地上には、東西方向にのびる溝群があり、C地区のほぼ中央と、C・K地区の境界付近には北流する川跡がある。この両川跡に挟まれた微高地上には掘立柱建物・柵・柱穴群が分布する。K地区の遺構は少なく、南北及び東西方向にのびる溝と、建物の復元にまでいたらなかつた柱穴が若干存在するのみである。

#### 1. 掘立柱建物

C地区東部の川跡に挟まれた微高地上に分布する。掘立柱建物や柵の柱穴は約190個検出できたが、このうち建物3棟と柵1例が復元できた。柱穴は、発掘区の北側で少なく、南側に集中してみられることから、これらの建物群は、建物集中域のはば北側のはずれに位置するものであろう。柱穴の埋土には中世の土師質小皿や陶器皿が含まれており、時期は中世と考えられる。C地区的南東側に隣接するL地区でも、中世の掘立柱建物が検出されており、これに続くものであろう。

**SB 050 A・B** 地山上半が削平されているため、柱穴の一部は検出できなかったが、5間（14.4m）×3間（7.2m）の南北桿建物となる。4面すべてに扉が付き、身舎は3間×2間である。身舎はわずかに西にずれて建て替えられており、旧建物をSD 050 A、新期のものをSD 050 Bとする。梁行柱間寸法は、やや不ぞろいではあるが、大体2.4m（8尺）等間になると考えられるが、桁行柱間寸法は、中央3間及び身舎では約3.0m（10尺）、南北両端の扉の部分では約2.7m（9尺）となる。扉の出は、南・北面で約2.7m（9尺）、東・西面では約1.2m（4尺）である。主軸は、約4度西偏する。柱穴の掘り方は直徑20~40cmの円形ないし梢円形を呈する。柱根の残るものはないが、北妻の東第2柱穴の底部には10cm×14cmの方形の鐵板が敷かれている。また、身舎柱穴底には扁平な小自然円礫を用いた礎石が置かれている例が多い。柱穴の切り合いで、後述のSB 052より古い。

**SB 052** 建物の大半は、発掘区外にのびると考えられる。柱穴は、北側柱列3間分と、西側柱列1間分のみ検出されている。扉は確認されていないので、柱穴配列は、SB 050と異なる。北側柱列の柱間寸法は不ぞろい、西側柱間寸法は約2.4m（8尺）である。柱穴の掘り方は円形で、直徑もやや小さく約23cmである。仮に南北桿建物とすると、主軸は約1度西偏する。

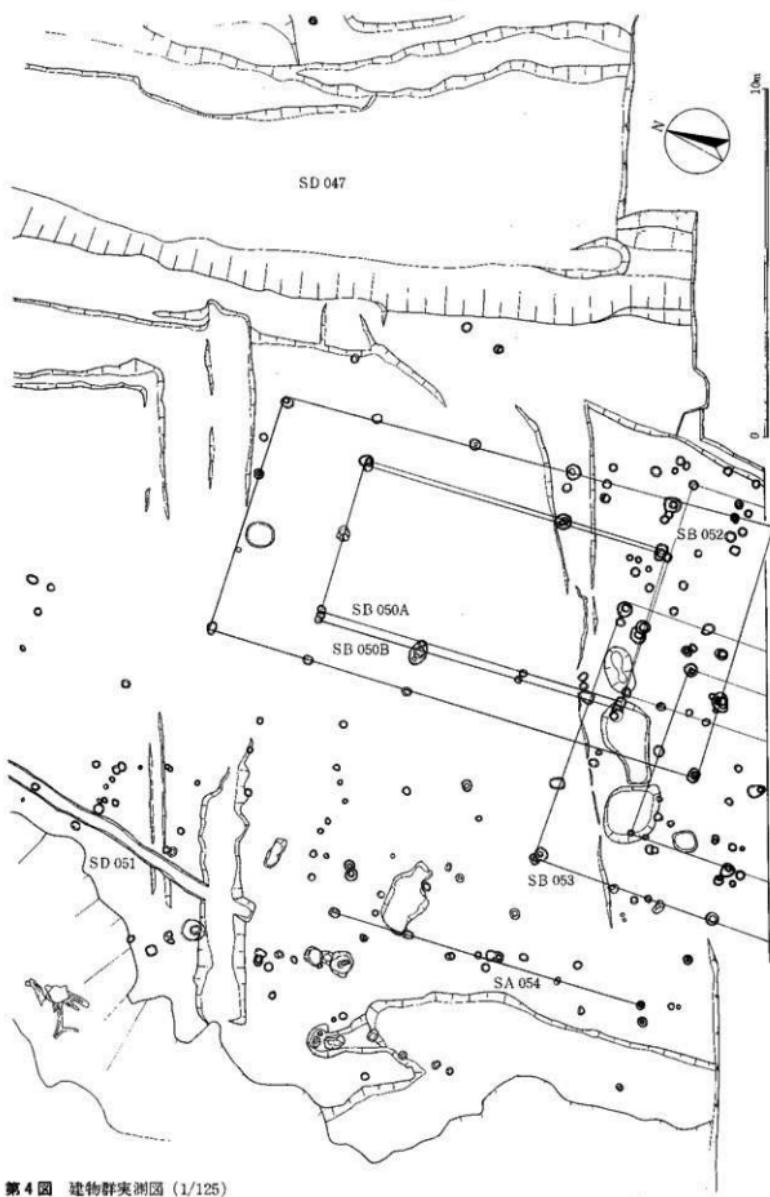
**SB 053** 建物の南半分は発掘区外にのびており、全形は不明であるが、柱穴配列の類似から、SB 050と同様、梁行3間の南北桿建物と考えられる。身舎は梁行2間で、純柱となる可能性がある。北・東・西の3面に扉が付くところから、これもSB 050と同じく4面扉となる可能性が強い。柱間寸法は全体に不ぞろいが目立つが、桁行柱間寸法は、北から2.4m（8尺）、3.0m（10尺）となる。東西両扉の出は、約1.5mと1.3mである。柱穴の掘り方は、直徑25~40cmの円形ないし梢円形を呈する。西側柱列北第3柱穴には柱根が残る。主軸はほぼ真北である。

(山本正敏)

#### 2. 柵

**SA 054** SB 050の西側で4間分検出されている。方位は約3度西偏しており、SB 050の主軸とはば一致する。柱間寸法は北側2間が約2.2m、南側2間が約2.4m（8尺）となる。

(山本正敏)



第4図 建物群実測図 (1/125)

### 3. 川 跡

C地区のほぼ中央部に南北に走る川跡が存在し、C地区とK地区の間をやや小規模な川跡がやはり南北に走っている。前者をSD 049、後者をSD 047と命名した。

**SD 049** 若干蛇行しながら北流する川跡である。川幅は約30mをはかり、遺物包含層の上面からの深さは約1.5mをはかる。川の立ちあがりは東岸で急角度となり、明瞭な肩部を形成する。発掘区の南側はゆるやかな段差が認められ、狭い階段状の平坦地となっている。西岸はだらかな立ちあがりとなり、川の肩部は不明瞭となっている。なお、川跡のほぼ中央部で、幅が約4mの掘りこみを検出しているが、これはは場整備直前まで使用されていた用水路である。

川の覆土の堆積状況を眺めると、川の東側では水平な連続的堆積を示していない。覆土の上部では黒褐色の粘質土層と淡黄色の砂質土がブロック状に混入している。下部の方では暗青灰色の粘質土が主体となり、若干の砂質土がブロック状に混入する状況を呈する。これに対して、川の西側では比較的単調な水平堆積となっている。黒褐色の粘質土と淡灰褐色もしくは淡黄灰色のシルト質土が互層となって存在している。川床面は挙大から人頭人の礫を多く含む砂礫層である。この川床の上面に薄く砂層が堆積し、遺物の大半はこの砂層から検出した。

覆土の堆積状況は流路がしだいに西側へ移動していった様子を想起させる。西側に弧を描くゆるやかな蛇行となっている状況からも、上記の想定は首肯できる。

過去の調査では史跡指定地内で検出された掘立柱建物群の東側で「沢」が確認されている（高島他1974）。また、昭和58年に実施された史跡指定内の調査では中央部を北流する「幅35~40mの河川」が検出され、C地区の川跡への連続が追求されている（舟崎1983）。これらの事実から考察すれば、CからH地区のほぼ中央部を旧河川が流れ、日本海へそそぎむ光景が復原できる。旧河川は西側へゆるやかに蛇行して流れ、漸次西側へ移動したと考える。結果として幅30m以上の川跡が形成されたものの、往時の川幅は30m以内であったと理解できる。

**SD 047** ほぼ直流して北側へ向かう川跡である。川幅は約8mをはかり、深さは表土から約1.5mをはかる。西岸は急角度の立ちあがりとなり、明瞭な肩部を形成する。東岸はややゆるやかな立ちあがりを示し、階段状の狭い3段の平坦地を形成する。

覆土の堆積状況は単調な凸レンズ状の水平堆積を示す。上部は黒褐色と茶褐色の砂質土が互層となって堆積する。下部の方はブロック状の砂質土を混入した粘質土が堆積する。川床は挙人の小礫を多く含む砂礫層となっている。

（松島吉信）

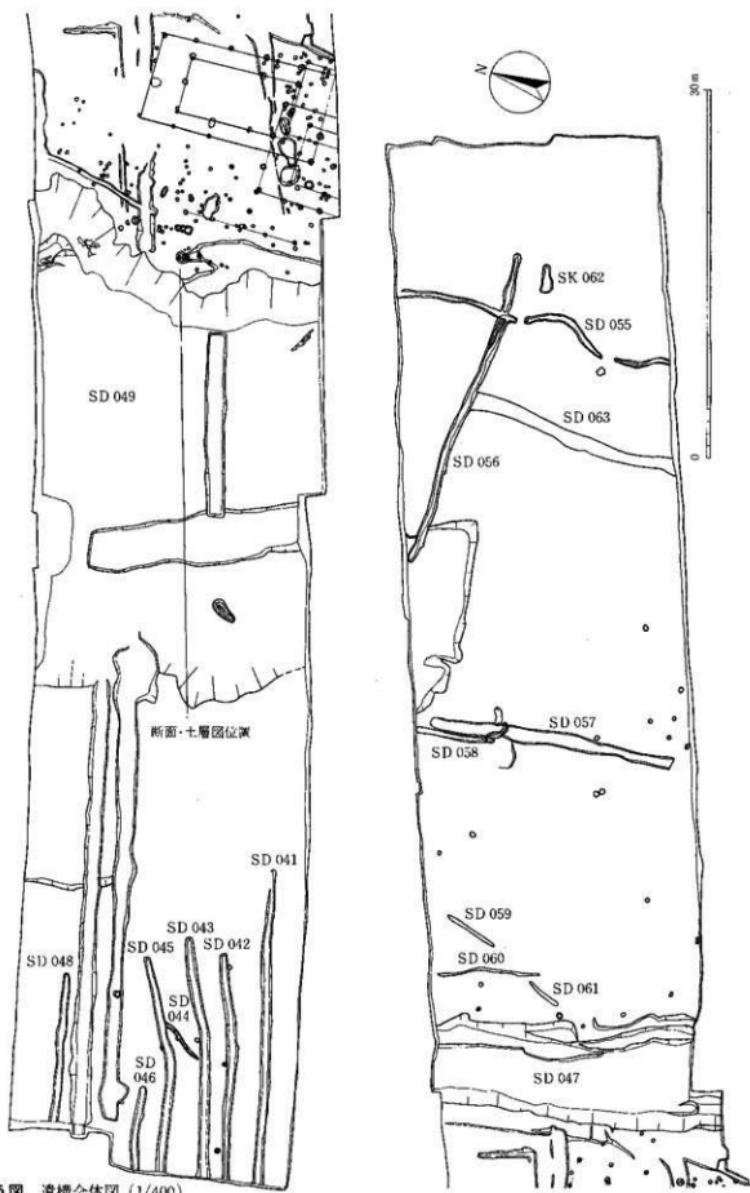
### 4. 溝

**SD 041~043・045・046・048** C地区の西側に位置する。6本の溝が2~3m間隔で平行しながら、東西方向に流れる。幅が40~50cmで、深さは20~40cmをはかる。覆土は上部に小礫まじりの砂質土があり、下部に薄く黑色土が堆積する。遺物は出土せず、所属時期や性格はわからない。

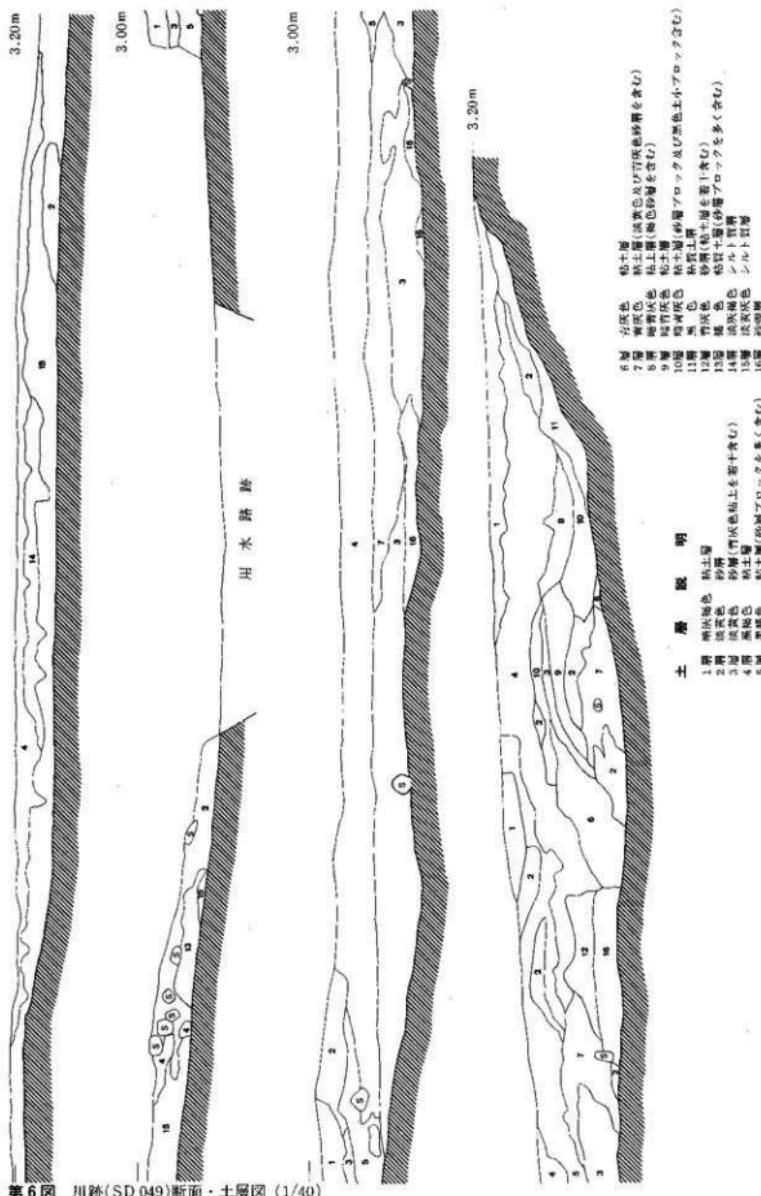
**SD 055~061・063** K地区のほぼ全域に分布する。いずれも直進する小溝であるが、その方向に規制性はない。黒褐色と茶褐色の砂質土が覆土として堆積する。幅は20~40cmで、深さは10~20cmをはかる。

### 5. 土 坑

**SK 062** K地区の東端に位置する。長軸で2.1mをはかる楕円形を呈し、黒褐色の砂質土が堆積する。（松島吉信）



第5図 遺構全体図 (1/400)



# IV 遺 物

C・K地区で発掘された遺物は、土器・石器・木器などで、整理箱約30箱の量である。このうちの大半は川跡 SD 049からの出土で、その他に柱穴・溝・表土などからも出土しているが量は少ない。時期は、古墳時代から近世まであるが、平安時代と中世の遺物が主体を占める。SD 049からは、平安時代と中世の遺物が混在して出土したが、相対的に、平安時代の遺物は小破片で角の磨滅したものが目立ち、中世の遺物は完形に近いものや大型破片が多い。近世以降の遺物は、表土や、SD 049の覆土でも上半部に散在していた。

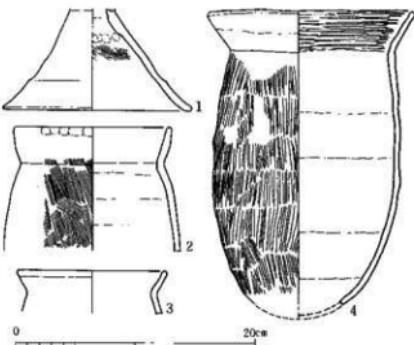
## 1. 古墳時代

土器器の脚部と甕（第7図）が出土している。1は、器口の脚部と考えられる。受け部を欠くが、脚部は「ハ」の字形に開き、途中わずかに段をもつ。全体に磨滅が顕著であるが、内面上部には指頭圧痕とハケメが残る。時期は、北陸の土器第2様式〔吉岡1967〕に比定できよう。2は、口縁部が外反し、ゆるく立ち上る甕である。体部外面はハケメ調整し、内面には輪積み痕が残る。口縁部外面には指頭状痕がみられる。3も口縁部が「く」の字形に外反する甕であるが、奈良時代以降に属する可能性がある。

4は、K地区南部のトレーナーから出土した甕で、ほぼ完形である。器高は推定25.6cm、口径は17.2cmで、胴の振りの少ない、丸底の長甕になる。口縁部は「く」の字形に外反し、内面は横方向のハケメで調整する。体部外面は縦方向のハケメで調整し、内面には輪積み痕が残る。

2・4の甕は、小杉流団内No.7遺跡〔上野他1982〕や同No.21遺跡〔上野他1983〕などに類例があり、やや時間幅を考慮しなければならないが、一応7世紀代の年代を与えておきたい。

(山本正敏)



第7図 古墳時代の土器実測図 (1/4)

## 2. 平 安 時 代

### (1) 土 器

#### (a) 須 惠 器 (第8・9図)

須恵器の器種としては、杯・杯蓋・皿・鉢・壺・甕・双耳瓶・甕がある。土器類の分類にあたっては、平城宮調査報告〔奈文研1962・1976他〕を参考に、器形の違いをA・B・C…で、法量差をI・II・III…であらわすこととする。以下器種ごとに説明する。

杯蓋 (1~11) 杯蓋は径14~16cmのI類 (1~4), 11.5~13cmのII類 (5~10), 10.5cmのIII類 (11) に区分できる。頂部にはボタン状のつまみが付き、端部は、丸くおさめるものが多く、逆三角形状に下方へ折るものはない。頂部調整はヘラケズリのみられるもの (4・7・8) が多く、ロクロナデのもの (1)

や、回転糸切り痕を残し、肩部にのみヘラケズリを加えるもの（6）は少ない。

**杯**（12～48） 無高台のA類（24～35）、高台の付くB類（12～23）、体部中ほどに稜をもつC類（48）に分類できる。口縁部破片のうち、外傾度の大きい39・40・44・46・47などはB類に、その他はA類と考えられる。杯Bは、全形を復元できるものは少なく、口径推定14cmになる14以外は、口径12～13cmが多い。杯Aは、体部が直線的に開く形態をとり、底部の切り離しはヘラ切りである。杯Cは、1点のみ出土している。体部中位に稜を有し、口縁部が強く外反するもので、いわゆる佐波理鉢の模倣形態である。富山県東部では、魚津市佐伯遺跡から出土している〔橋本他1979〕。

**皿**（49） 口縁の外傾度は杯Aに比べて著しく小さく、端部はさらに折れて外方に開く。高台が付くかどうかは不明である。

**鉢**（57） 口縁端部が外方に折れ、体部は直線的に開く器形になるものと考えられる。

**壺**（51・52・55） 壺A（51・52）は小型の壺で、口縁部及び体部以下の形態は不明。壺B（55）は、口縁部破片のみであるが、広口壺になるものと考えられる。

**双耳瓶**（54・56・58・59） 54は、頭部からゆるく外反しながら開き、端部が外方へ強く屈曲し、短く立ち上る形態の口縁部である。把手は、不整形な半円形（56）と、下部に段を有するもの（58・59）がある。

**甕**（60～66・69～71） 口径60cm前後のI類（60・66）、50cm前後のII類（61～63）、30cm前後のIII類（69～71）に分類できる。口縁端部は上下に細長く肥厚するものや、端部外面に隆起のめぐらものなどの変化がみられる。62・65は口縁部外面に波状文がめぐら。体部は、一般的には内面は同心円、外面は平行タタキが施されるが、内面については、同心円以外に平行タタキや格子状タタキなど、第9図79～94のような種々のあて具痕がみられる。

なお67・68・72～78は、壺・瓶・甕類の口縁部と底部破片である。

#### (b) 灰釉陶器（第8図50）

杯の口縁部小破片が一点出土している。口縁端部はわずかに外反する器形で、内外面とも施釉されている。

#### (c) 土師器（第10図）

土師器の器種としては、杯・鉢・甕・鍋がある。

**杯**（95～122） 無高台のA類（95～107）と、高台の付くB類（108～109）があるが、圧倒的に前者が多い。110～122の口縁部破片は、高台が付くかどうか不明であるが、ここではA類に含めておく。杯Bの高台はあまり高くない。杯Aは、口径16～19cmのA I類（110～112）、13～14cmのA II類（95・96・113～119）、11～12.5cmのA III類（120～122）に細分できる。体部はロクロナデで調整し、底部は回転糸切りによる切り離しがみられる。

**鉢**（123～126） 底部は不明であるが、体部はやや丸みをもって開き、口縁部が強く外反して、端部が短く立つ器形である。口径が22～24cmのI類（123～124）と19cmのII類（125・126）がある。

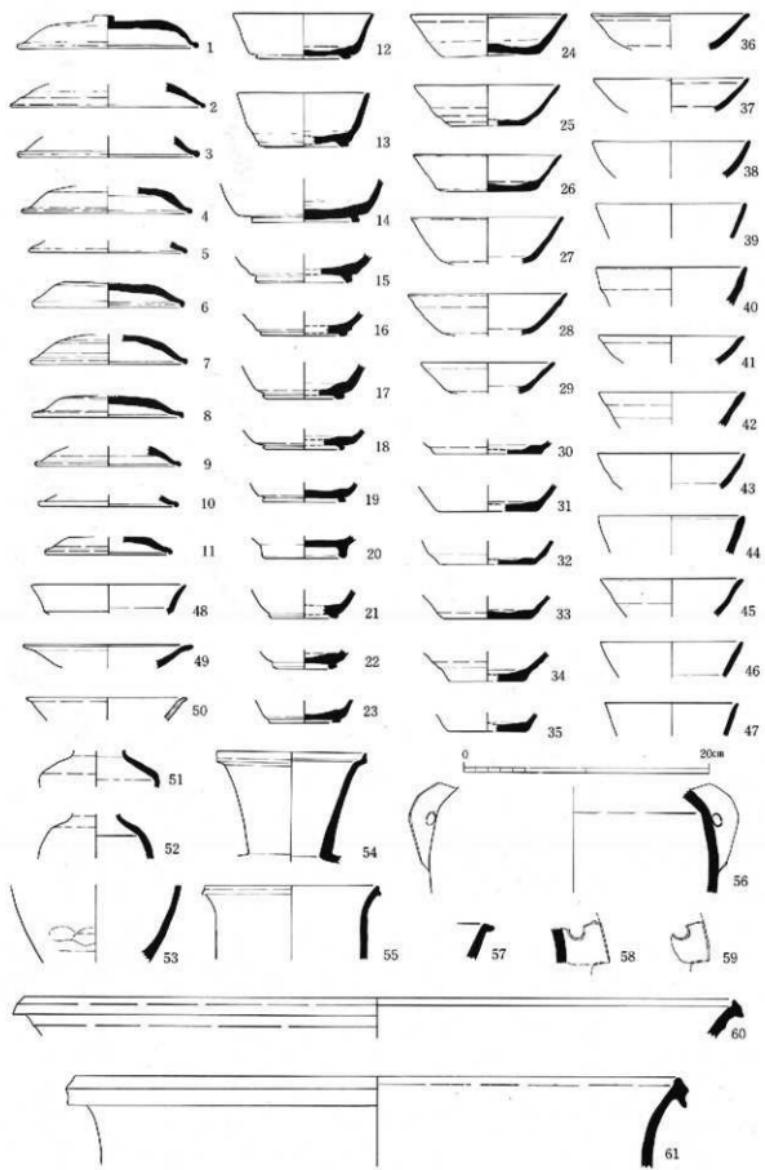
**甕**（127～140） 甕も全形を復元できるものではなく、口縁部破片のみであるが、口径20～30cmのI類（127～132・134～136）と、13～18cmのII類（133・137）に分類できる。前者は、口縁端部を肥厚させ内側に丸く曲げるものが多く、長剣形で丸底の器形になるものと推定される。

**鍋**（141） 口径約38cm。口縁部は外反し、さらに端部が肥厚して内側に折れる。

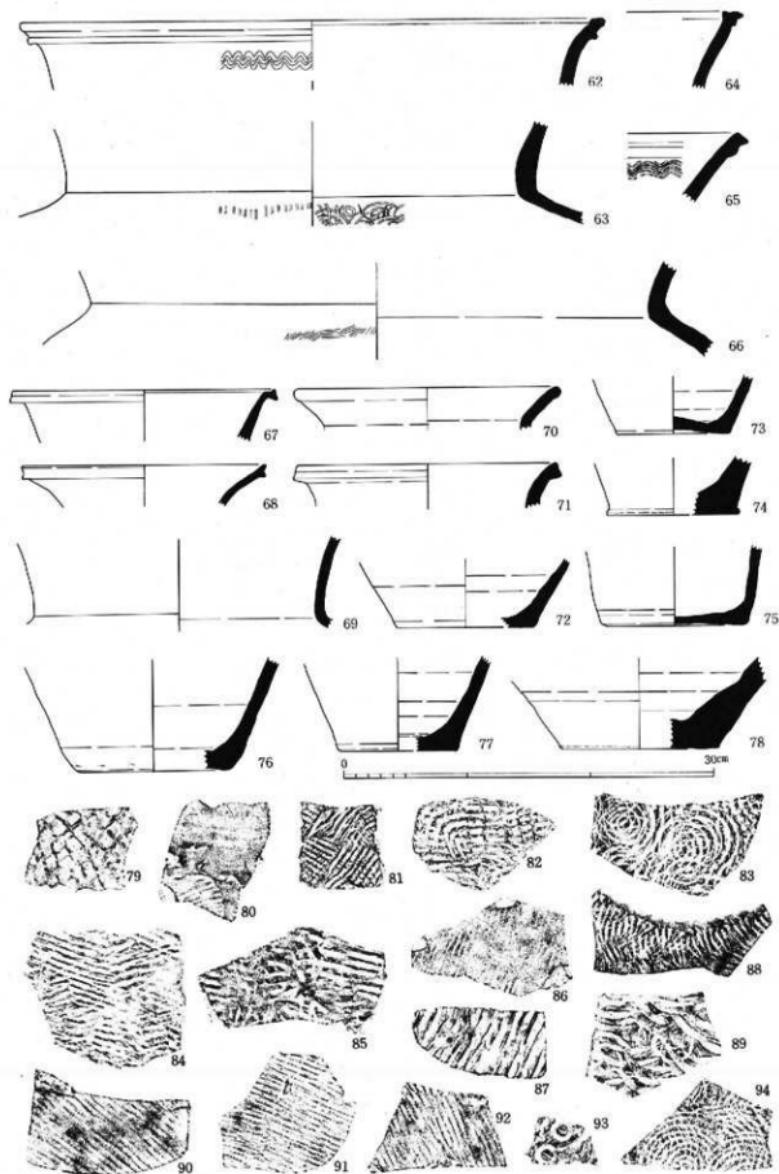
#### (d) 黒色土器（第10図）

器種は、杯と鉢がある。杯は内面をヘラミガキし、黒色化するものである。

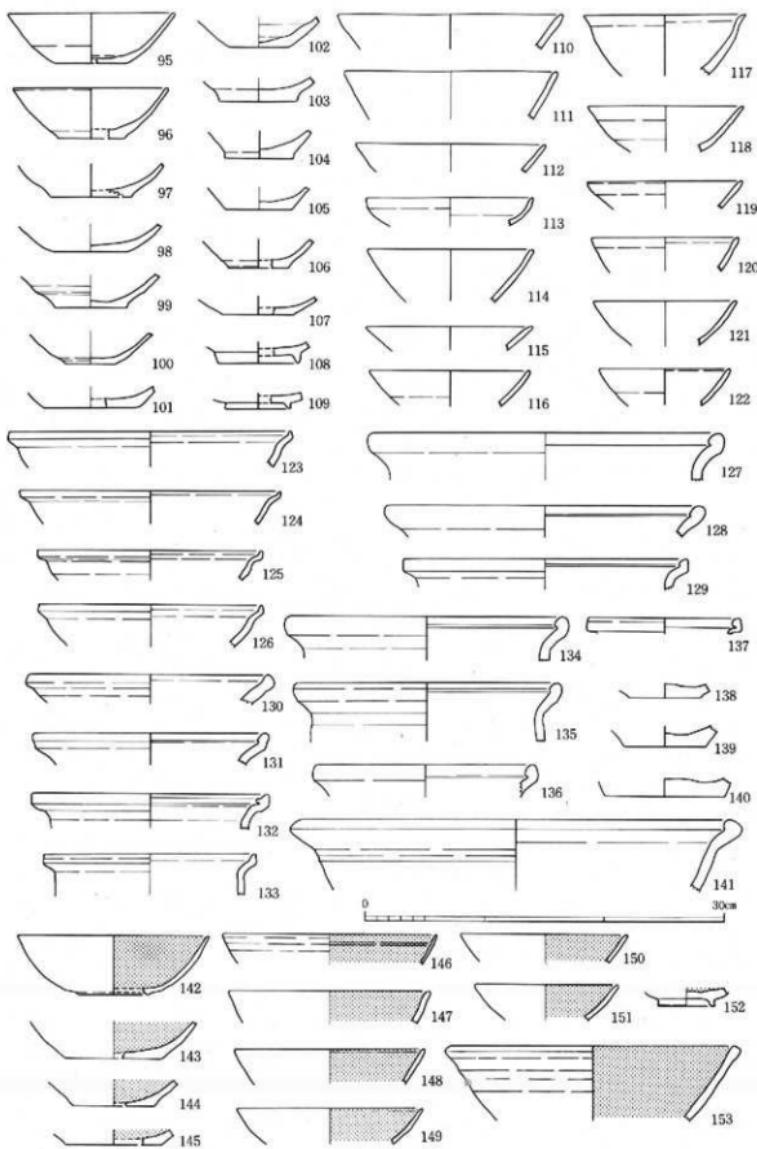
**杯**（142～152） 無高台のA類（143～145）と、高台の付くB類（142・152）に分類できるが、後者は少



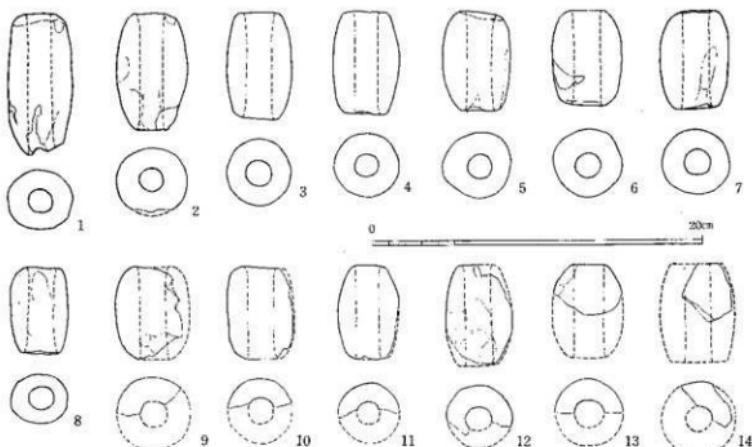
第8図 平安時代の土器実測図 (1/4)



第9図 平安時代の土器実測図・拓影(1/4, 拓影は1/3)



第10図 平安時代の土器実測図 (1/4)



第11図 土錐実測図 (1/3)

ない。口縁部破片 (146~151) は、一応 A類に加えておく。B類の142は低平な高台が付く。A類はさらに口径16~18cmの A I類 (146~149), 14cmの A II類 (150), 12cmの A III類 (145) に細分できる。146は非常に薄手の作りで内面に浅い沈線が一条めぐる。A類の底部は、回転糸切りによる切り離しとなる。

鉢 (153) 体部が直線的に開き、口縁端部がわずかに肥厚する。口径は約25cmである。

#### (e) 小 級

C・K地区から出土した平安時代の土器群は、貯蔵形態が須恵器、煮沸形態が土師器という機能分化は奈良時代と共通するが、供膳形態は須恵器と土師器を併用する点差異が認められる。これらは、川底から中世の遺物と混在して出土しており、二次堆積したものが多く、一括資料としては良好なものではない。組成と形態的な特徴は、庄園の庄家城 (A・B地K) とその周辺から出土した土器群 [高島他編1974] と比較しても差異はほとんどなく、ほぼ同時期とみなすことができる。A・B地区出土の土器群の年代については、その最古のものを8世紀末葉に比定する説 [橋本・岸本1976] と、9世紀初葉以降とする説 [吉岡1983] があり、微妙な差を生じているが、主体的な土器群を9世紀代から10世紀初葉とする点ではほぼ一致している。最古の一群の年代については、遺跡の形成時期の問題でもあり、今後より詳細な分析を進めて解決しなければならないが、C・K地区出土の主体的な土器群については、従前の成果にもとづき、ほぼ9世紀代から10世紀初葉にかけての時期と理解しておきたい。

(山本正敏)

#### (2) 土 錘 (第11図)

川跡 SD 049を中心、土師質の管状土錘が破片も含めて14点以上出土している。体部径は4~4.5cmで、中央に直径1.5cm程の貫通孔を有する。体部長は、1がやや長く8.6cmである他は、5.3~7.1cmの範囲に含まれる。完形品は1~7の7点あり、重量は78gから111gまで、平均値は93gとなる。胎土は、きめが細かく砂粒の混入の少ない灰白色を呈するもの、砂粒の混入が多く、灰褐色ないし赤褐色を呈するもの、この中間的なものなどがある。1は、砂粒の混入の目立つ個体であるが、体部に黒斑状に黑色化した部分がみられる。

(山本正敏)

(3) 製塙土器 (第12図)

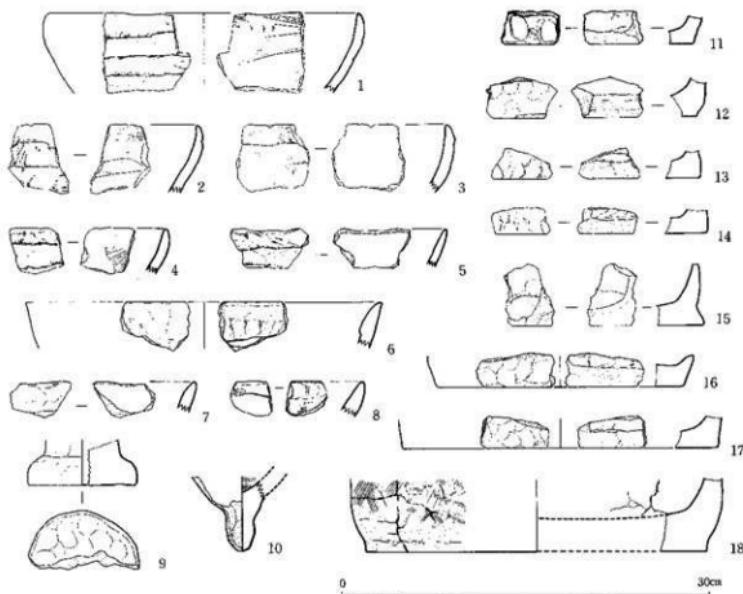
C地区の川跡 SD 049の川底から大小の破片が約300点ほど出土した。その大部分は厚手の平底製塙土器で、棒状尖底製塙土器はごく少量である（第12図）。また、C地区の東側のK地区でも平底製塙土器の破片が数点出土した。

(a) 棒状尖底製塙土器 能登式製塙土器の棒状尖底タイプで、口縁部と尖底部の破片がある。ラッパ状に開く口縁部1～4は、口縁端部が立ちあがりぎみに内傾する。外面には1.5cm前後の凹部をもって横方向に粘土紐の接合痕を顕著にとどめ、内面にはハケメ状の擦痕（其設腹縫によるものか）をとどめる。口徑の復原できる1は口径が25.2cmあり、爾余のものを含めて大型である。口縁部の厚さは8mmないし9mmあり厚手である。

1点だけ出土した尖底部10は、剝離下端の器壁の厚さが1.5cmもある。口縁部と同じく厚手である。尖底部は中ほどの部分で直径2.3cmある。外面に指によるオサエの痕跡が、内面にハケ目がみられる。

(b) 平底製塙土器 全形をうかがえるものはない。遺存する底部からみてバケツ形の平底製塙土器と考えられる。底部（11～18）には、15のように下端が外方へ突出して立ちあがるタイプ、14・17のように下端からただちに立ちあがるタイプ、18のように外方へゆるく張りだして立ちあがるタイプなど、いくつかのバラエティーがみられる。底部は厚さ2cm前後のものが多く、15では2.5cm、最も厚手の18では3cmある。18は底径が約28cmある。上記の口縁部1～4よりも厚手の6～8は、これらの平底製塙土器の口縁部と考えてよい。器壁の厚さは1cm前後ある。口縁部はやや肥厚し外反する。6の復原口径は約29cmである。

(c) 土製支脚 (9) 中央の土製支脚で、下端部が外方へ張りだすタイプである。下端部の外面向と外底面に指頭圧痕をとどめる。土器製塙に伴う土製支脚である蓋然性が高い。  
（岸本雅敏）



第12図 製塙土器実測図 (1/4)

### 3. 中世

中世の遺物としては、中国製磁器・瀬戸・珠洲系陶器・土師質皿がある。柱穴・溝・表土などから若干出土している他は、大半が川跡 SD 049から出土している。時期的には、平安時代末期から鎌倉時代のものが中心で、室町時代前期に降るものも少量みられる。

#### (1) 中國製磁器（第13回1～32）

##### (a) 白 磁 (22～32)

白磁には、碗・皿・壺がある。碗は、口縁部の形態から大きくA～Cの3類に分類できる。A類(22～26)は、口縁端部が短く外方に折れるもので最も量が多い。体部内面上位に沈線がめぐるものや段を有するものが多い。胎土は灰白色を呈し、釉は半透明の灰白色のものを薄くかける。23は、体部下半を露胎とし、内面は無文である。B類(27)は、口縁部がやや内凹ぎみにのびて、端部を丸くおさめる。内面上位には沈線がめぐる。釉は、やや透明度の高い灰色で、貫入が多くみられる。C類(28)は玉縁状の口縁部を有する。29～30は、体部内面及び内底面に描文を施すもので、A類に含まれる可能性が強い。30の高台は細く高いもので、外面とも露胎となる。

32は小型の皿で、胎土は黄味白色を呈し焼成はあまり。釉は乳白色で貫入が多い。底部は露胎となる。31は、壺になると推定される。体部径約19cmで、外面には透明度のやや高い釉がかけられる。内面は、一部に薄く釉がかかる他は、無釉である。

##### (b) 青白磁 (20・21)

青白磁は、合子の蓋と小型壺の小片が出土している。両者とも透明度の高い水色釉がかかり、胎土は白色である。合子の蓋(20)は、頂部に型押しによる菊花文、側面にはこれも型押しによる細い蓮弁文が二段みられる。小型壺(21)は、口縁端部上面と内面の釉はカキ取るが、内面には水色の釉がかかる。体部外側には蓮弁文の影り込みがみられる。

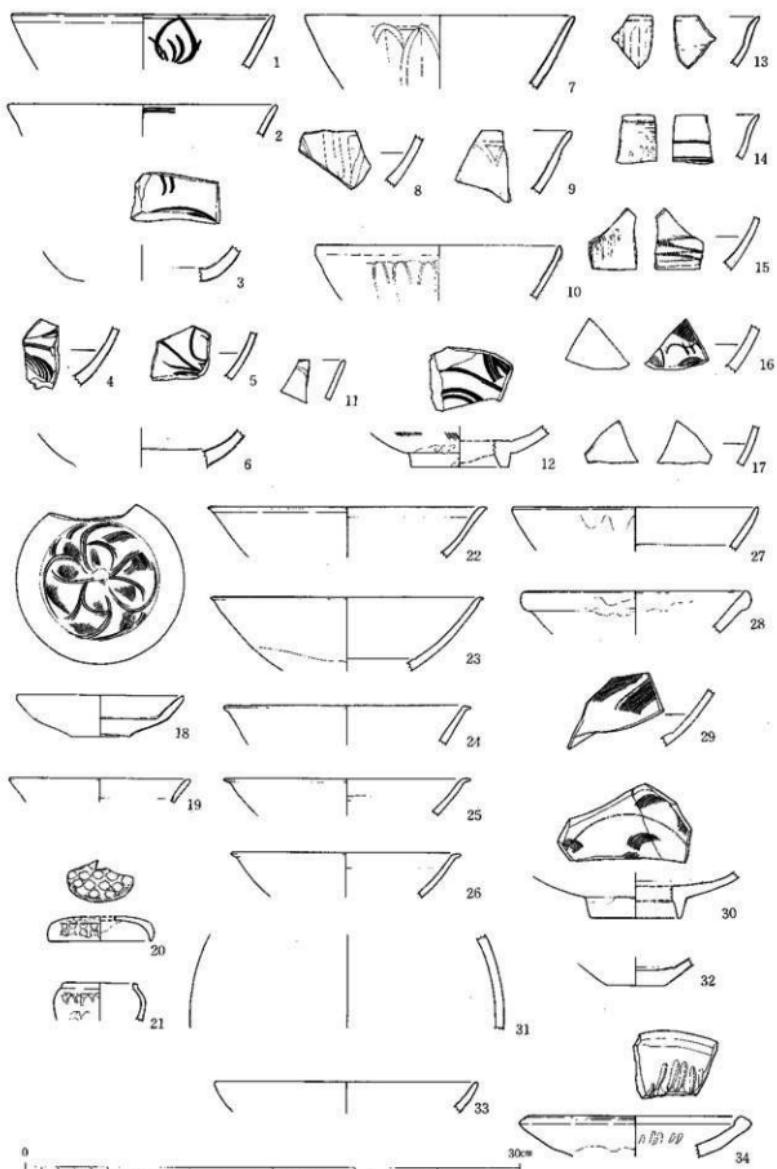
##### (c) 青 磁 (1～19)

青磁は、龍泉窯系(1～11・18)と、同安窯系(12～17・19)に大きく分けることができる。

龍泉窯系青磁碗は、さらに体部外面が無文で、内面に片彫りや横描きの文様を有するA類(1～5)、外側に蓮弁文を有するB類(7～11)、内外面無文のC類(6)に分けられる。B類はさらに、鍋進弁文を片彫りにするB<sub>1</sub>類(7～9)と、弁先の丸いや細身の蓮弁文を浮き彫り風に表現するB<sub>2</sub>類(10)に細分できる。胎土の色調は灰色を呈するものが多い。A類の1は、緑味青灰色の釉がかかり、内面には片彫りの蓮華文が施文される。5は青味灰色の釉がかかり、同じく片彫りの蓮華文が施文される。B<sub>1</sub>類は、釉が灰味青ないし灰味青緑を呈する。釉には細かな気泡が多くみられ、貫入は少ない。B<sub>2</sub>類の10は、明るい青色の釉が厚くかけられる。

皿(18)は口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。口径10.1cm、器高2.7cmの大きさで、体部中位で屈曲して立ち上る。内底面には横描きで草文を描く。釉の色調は、青緑色で細かな気泡がみられる。外底面の一部の釉はカキ取られている。

同安窯系と考えられる青磁も碗(12～17)と皿(19)がある。胎土の色調は灰色で、釉は非常に透明度が高くガラス質のものである。釉の色調は暗い黄緑色ないしオリーブ色を呈するものが多い。碗は、口縁部がやや外反する器形で、内面には沈線をめぐらせ、体部外面に片彫りの沈線を縱方向に施文するA類(13・14)と、口縁部の形態は不明であるが、体部外面に横目を施すB類(12・15)がある。12の高台は無釉で、外面



第13図 中世の陶磁器実測図 (1/3)

を垂直に、内側を斜めに削り出す。体部内面には、櫛状（15・16）あるいは片彫り（12）による文様が施される。19は皿の口縁部破片である。器壁は薄く、内面に段を有する。透明度の高い青緑色の釉がかかる。

以上のうち主として碗・皿類を、近年豊富な資料を用いて研究が進みつつある北九州一とくに太宰府での分類〔横田・森田1978〕に対比すると、以下のようなになる。（左側が当遺跡での分類）

白磁碗A類	—V <sub>a</sub> 類	飽泉窯系青磁碗A類	—I <sub>24</sub> 類	同安窯系青磁碗A類	—III類
C類	—IV <sub>2</sub> 類	B <sub>1</sub> 類	—I <sub>5b</sub> 類	B類	—I類
"皿	—VI <sub>1</sub> 類か	B <sub>2</sub> 類	—III類か		
"	皿	"	I <sub>2</sub> 類		

## (2) 漬

戸（第13図33・34）

33は灰釉碗の口縁部破片である。釉は透明で質入が入る。34はオロシ目で、口縁部内・外面に薄く灰釉がかかる。口縁端部は内側に少し肥厚し、内底面には、ヘラの片彫りによる荒いオロシ目が施される。

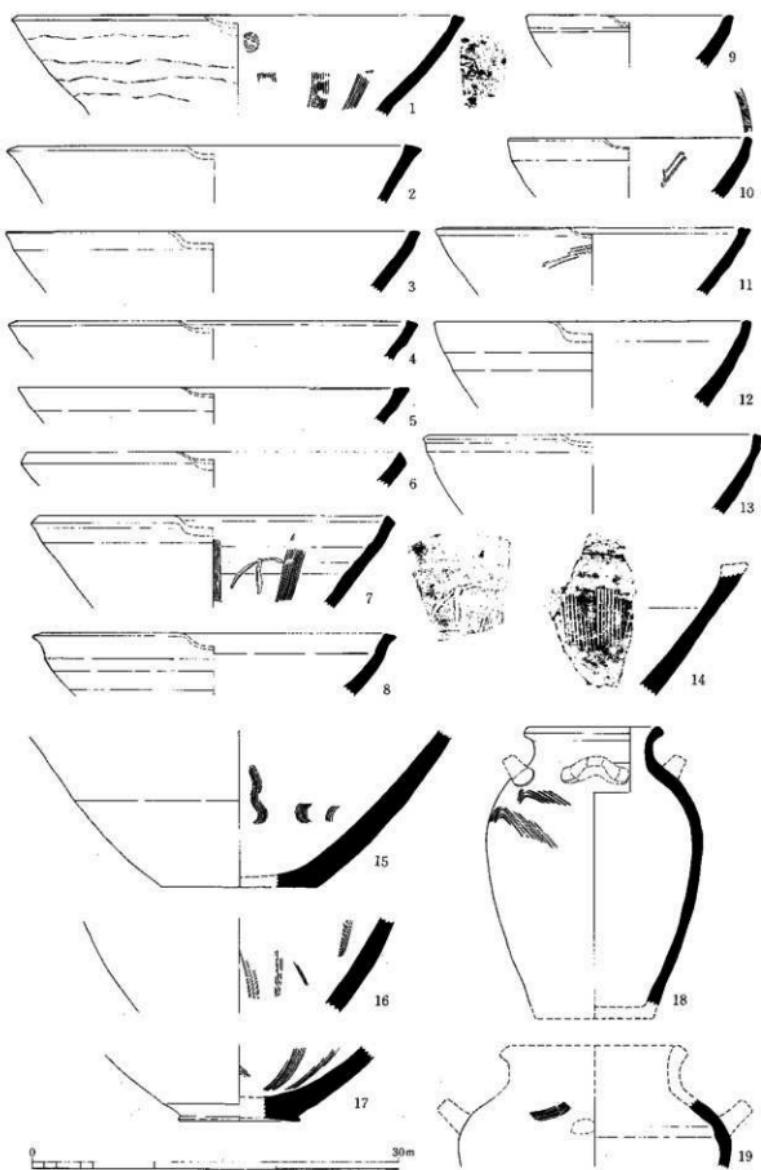
## (3) 珠洲系陶器（第14・15図）

器種は、壺・甕・鉢の基本3種がみられる。時期的には珠洲系陶器編年〔吉岡1981〕の第Ⅰ・Ⅱ期を中心とし、若干Ⅴ期に降るものがある。ここでは各器種ごとに分類して説明し、編年的な問題は第Ⅷ章調査の成果で若干の考察を行なうこととする。

鉢（1～17） 体部がややふくらみをもって立ち上り、端部が水平になるA類（9・10・12）、直線的に体部が開き、口縁部がやや内凹して立ち上るB類（1～8・11・13）、内面に密なオロシ目を有するC類（14）に大別できる。このうちB類に属するものが最も多く、口縁部形態も、端部が外斜するもの、水平になるもの、肥厚するもの、外反するものなど変化が大きい。A類は、内面に確実にオロシ目を有するものなく、B類では、間隔をおいてオロシ目を施すものが多い。

1は、口径37cmで大型の部類に入る。口縁部内面の上部には、方形と十字を組み合せた押印を有する。色調は灰黒色で、胎土に砂粒を多く含む。体部外面には粘土絞輪積み紋を残す。10本前後を単位とする櫛状具を用い、4～5cmの間隔をおいてオロシ目を引く。7は、口縁端部が外斜し、オロシ目の間にヘラ記号が刻まれる。色調は灰色で焼成は良い。9は口径17cmの小型の鉢で、焼成はあまり、明灰色を呈する。10は、内面に櫛描波状文と、口縁端部に櫛状具による押圧がみられる。12はオロシ目が施されるかどうか不明。色調は、表面が暗灰色で内部は茶紫色である。内面及び口縁端部にはしもふり状に降灰がみられる。15は口縁部を欠くが大型の器形である。オロシ目は間隔をあけて波状に櫛目を引く。内底面は、使用による磨滅が顕著である。底部は静止糸切りがみられる。17も鉢底部で、内面のオロシ目は間隔をあけて引き、底面の切り離しは静止糸切りとなる。14は、口縁端部を欠くが、肥厚して櫛描き波状文が施される形態になるとされる。内面には9本を単位とするオロシ目が施され、内底面の磨滅は顕著である。胎土に砂粒を多く含み、色調は灰色で焼成は良い。

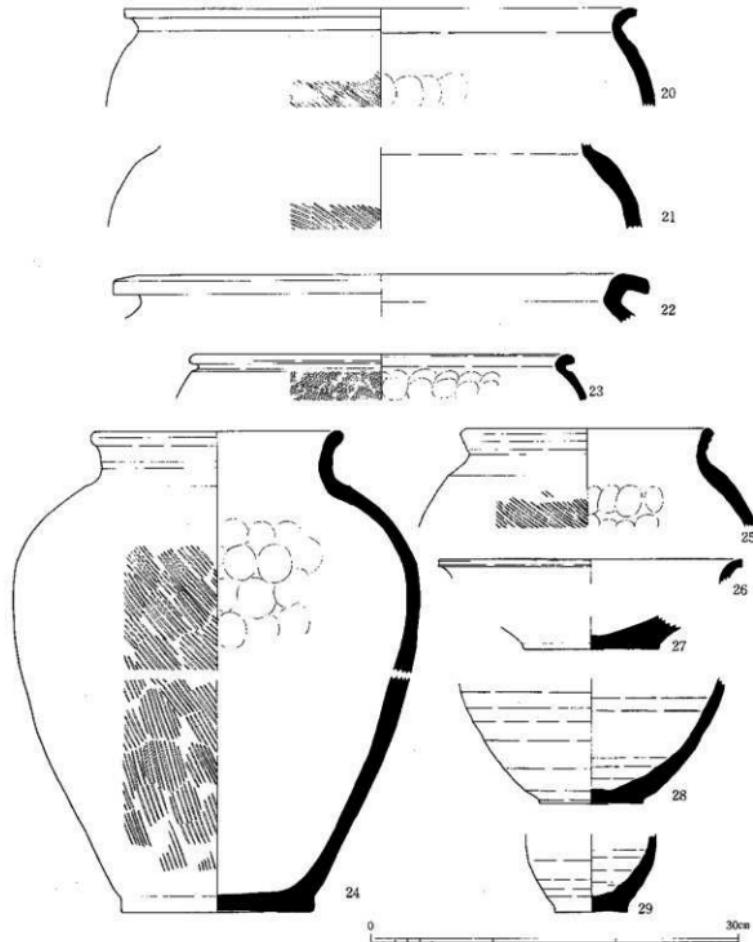
壺（18・19・24・25） 口径約20cm、器高約40cmのA類（24・25）と、口径約12cm、器高推定23cmで肩部に肥手の付くB類（18）がある。24はほぼ全形を復元できる。口縁部はゆるく弧状に外反し、端部は丸くおさめる。体部は卵形で、最大径はかなり上位にある。体部外面には平行タタキが施され、内面には無文のあと痕跡が残る。体部外面の平行タタキは、頸部から肩部にかけては施さない。体部下半もやや粗に施す。底部は静止糸切りによる切り離しとなる。色調は暗灰色で焼成は良い。25は、口縁部の外反度はやや弱く、端部はかるく面取りする。これも肩部は平行タタキが施されない。18はいわゆる四耳壺である。口縁部は弧状に外反し、端部は丸くおさめて沈線をめぐらす。肩部に4か所ブリッジ状の肥手を付ける。体部上半には、



第14図 珠洲系陶器実測図 (1/4)

横描波状文が二段にわたって施される。色調は青味灰黒色で焼成は良好。19は小破片であるが、18と同様横描波状文を有する四耳壺になると考えられる。

甕 (20~23) 口径64cmのA類 (23) と、40cm前後のB類 (20~22) に区分できる。22は、いわゆる人妻の部類に属し、肥厚した口縁部が強く外反し、体部の張りは少ないと考えられる。体部外面は、頸部直下から平行タタキが施され、内面は無文のあて具痕がみられる。色調はわずかに青味をおびた暗灰色で、焼成は良い。20は、やや器壁の薄い口縁部が強く外反し、端部は面取りする。並A類と同様、頸部から肩部にかけては平行タタキを施さずに無文とする。内面には無文のあて具痕が残る。青灰色を呈し、焼成は良い。21は、



第15図 珠洲系陶器実測図 (1/4, 23は1/8)

口縁部を欠くが、20のように肩部には平行クタキが施されない。22は口縁部が強く外反する形態のものである。

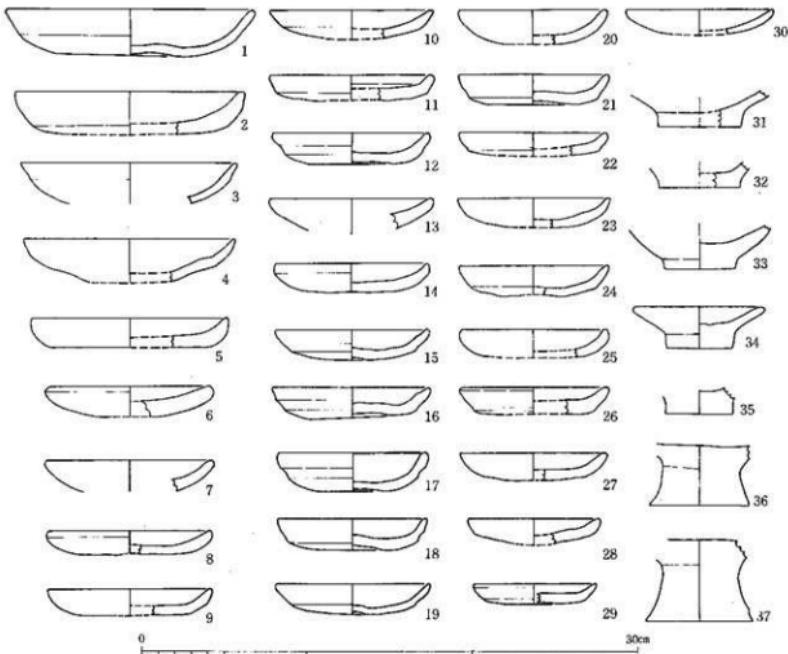
26は、口縁部のみの小片で器形は不明である。27は甕の底部と考えられる。28・29は甕の底部である。28は静止系切り、29は回転系切りによる切り離しとなる。

#### (4) 土師質Ⅲ（第16図）

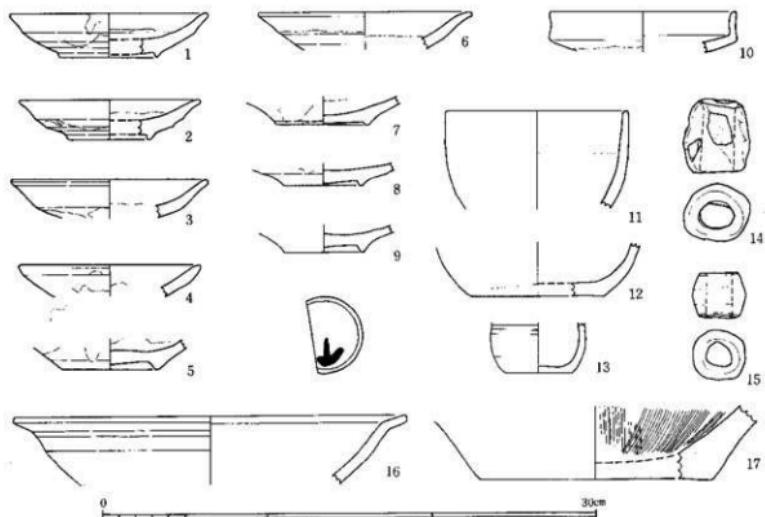
土師質の皿は、形態から大きく3類に分けられる。A類（1～30）は、手づくねもしくは型おこしによつて器形を作り、体部はやや内凹して立ちあがる。B類（31～35）は、厚さ1.0～1.5cmの円板状の底部に短い体部が付くもの、C類（36・37）は、体部の形狀は不明であるが、厚さ3.7～5.0cmの台状の底部になるものである。

A類はさらに、口径12～15cmのA I類（1～5）、7.5～10.5cmのA II類（6～30）に細分できる。1は、口径15cm、器高2.8cmをはかり、最大の大きさのものである。底部は型おこしによる可能性が強く、体部は横方向のナデで調整する。色調は、白みをおびた灰褐色で、体部の一部に黒斑状の黒色化部分がみられる。焼成は良好。2は、厚手の作りで色調は明るい赤褐色を呈する。4は、丸底風になり、体部が一度外反したのち立ちあがるものである。6は、厚手での作りで、体部と底部の境が不明瞭。体部は直線的にのびる。内面は灰褐色、外面は暗褐色を呈する。

A II類のうち、12・15・16・18・19・21などは、非常に規格性の強い一群である。口径は9.0～9.5cm、器



第16図 土師質Ⅲ測図（1/3）



第17図 近世の陶磁器実測図 (1/3)

高1.8cm程で、体部はやや内弯して立ちあがり、横方向のナデで調整する。体部下位にくびれをもち、底部との境には棱がみられる。底部はやや上げ底になる。色調は、灰白色ないし、ごくわずかに赤味をおびた灰白色を呈する。

30は、薄手の作りで体部と底部の区別がつかず、連続的に焼き丸底になる。胎土はきめが細かく、色調は明るい橙色で焼成は非常に良い。時期はやや下る。なお、3・8・30は、口縁部に煤状の炭化物が付着しており、灯火具として使用されたものである。

B類も底部の厚さが1cm前後B<sub>1</sub>類(31・32)と、1.5cm前後のB<sub>2</sub>類(33~35)に細分できる。全形を復元できる個体は少ない。34は、底部径が4cmで、体部は直線的にのびる。色調は暗褐色を呈し、焼成は良い。33は、体部がやや内弯ぎみになる。底部の切り離しは不明である。

C類(36・37)は、直径6.0cm厚さ3.7~5.0cmの台状の底部に、皿状の体部が付く器形になると考えられる。胎土はややザラザラしており、焼成はあまり良くない。色調は灰褐色。内外面ともロクロナデ調整され、底部の切り離しは回転糸切りである。  
(山本正敏)

## 4. 近 世

近世の遺物としては、越中瀬戸・唐津系陶器・染付がある。大半は表土からの出土であり、遺構に伴なう遺物はない。

### (1) 越 中 瀬 戸 (第17図)

器種は皿・碗・壺・鉢・盤・陶錠である。

皿(1~10) 器形から2種類に分類する。A類は体部が浅い角度ではば直線的に立ちあがるものとする。B類は底部から浅い角度で立ちあがった体部が、口縁部ではば垂直に屈曲するものとする。

A類は例外なく口縁部で小さな段を形成し、徐々にうすくなりながら、やや外反気味で口縁部が終了する。高台はすべて削りだしによって成形されている。脛付きから直線的に底部が立ちあがる個体と、付高台状に垂直に立つ高台を有するものが存在する。釉薬は鉄釉と灰釉が施される。施釉部分は外面ともに、口縁部から体部にかけてあり、外面底部と見込みには施釉されていない。

B類は10の1点のみである。赤褐色を呈した胎土で、鉄釉が施されている。口縁部の立ちあがりはやや内窓して「く」の字に成形されている。

碗・壺(11~13) 11の碗は口縁部で直径が約11cmをはかる。外面ともに鉄釉が施され、ほぼ直立した口縁部をもつ。12は壺の底部破片であり、底径は約8cmをはかる。内面では全面に、外面では外底面を除いて鉄釉が施されている。底面に回転糸切り痕を残す。13は胴部の直径で約6cmをはかる小壺である。胴部の外面に沈線による施文がなされている。外面にはうすい鉄釉が施され、底面には回転糸切り痕が残る。わずかに内窓した「く」の字状の口縁部を持つと考えられる。

鉢(17) すべて内面にオロシ目がつく擂鉢である。肥厚した底部から浅い角度で立ちあがり、体部でしだいに薄くなっている。内面には密にオロシ目が施され、約12本の凹線が1単位となっている。外面ともに薄く鉄釉が施され、概して粗雑な仕上げということができる。底部には回転糸切り痕を残す個体もある。また、内面に炭化物が付着したものもある。

盤(16) 口径は約24cmをはかる。ゆるく外窓しながら立ちあがった体部が、口縁部では水平に外側へ屈曲して終了する。胎土は赤褐色を呈し、釉薬には淡い灰黄色に発色した灰釉が用いられている。SD 049の覆上から出土している。

陶鑊(14・15) 長さ3~5cm、幅3~4cmをはかる。手づくねによって成形されており、胎土には微粒の砂礫が多量に混入する。概していびつな形となっている。鉄釉が施されている。

## (2) 唐津系陶器

皿と碗がある。皿は底部の破片であり、高台の直径が約4cmをはかる。淡い黄褐色を呈した胎土であり、胎土に類似した釉が施されている。見込みには重ねやきによると考えうる、輪状の無釉部分が観察できる。碗は口縁部の破片がある。黄灰色の生地に緑色が混入した釉薬が施されているものと、青味の強い瑠璃釉の施されたものが存在する。

## (3) 染付

大半が碗である。外面に描かれる文様は草花模様と網目模様がある。貫入が入るものもある。皿とみなしする破片が1点存在し、口唇部は釉薬が削りとられたいわゆる「口はげ」となっている。内面に草花文が描かれている。

(松島吉信)

# 5. その他の

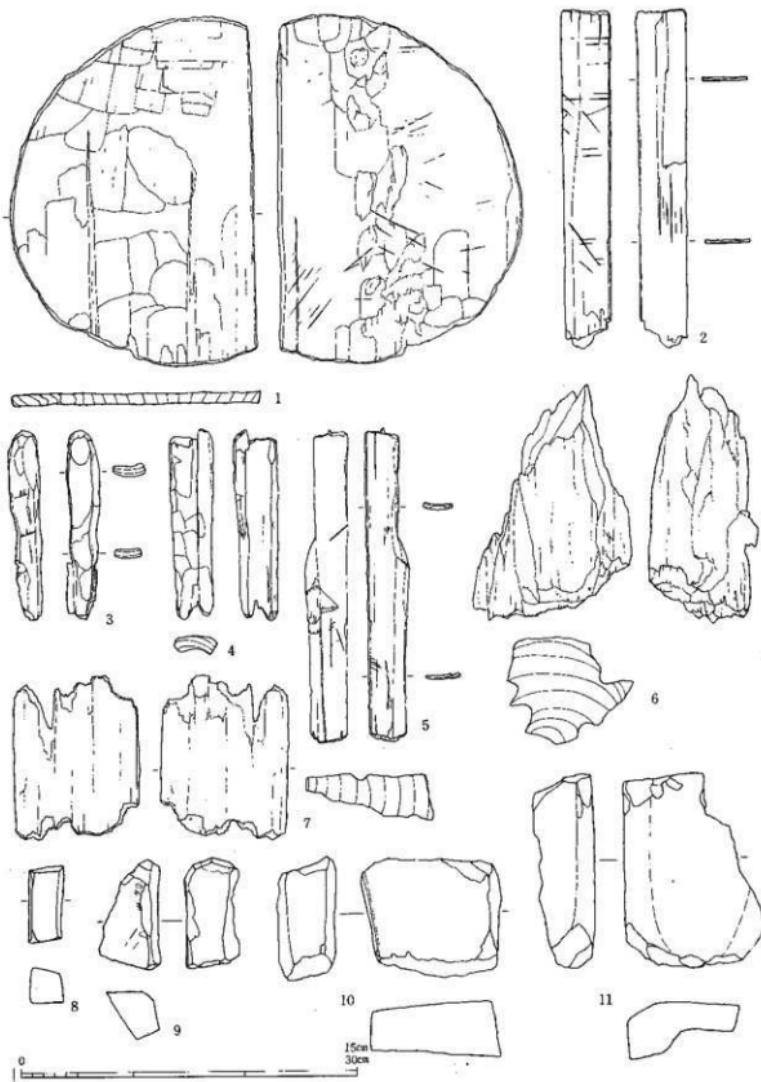
## (1) 木製品(第18図1~7)

オケ底(1), 側板(2~5), 柱根(6), 碇板(7)がある。オケ底は直径32cm, 厚さ1cmをはかる。内面に金属工具による削り痕を残す。柱根は四分割された素材が使用されており、基部のみが検出された。碇板は一辺が約12cmの方形を呈し、厚さは約3cmをはかる。柱根はSB 053, 碇板はSB 050 Bから出土した。

## (2) 砥石(第18図8~11)

8は断面が方形を呈した小型の立方柱で、砂岩製である。9と10は扁平な短筒型であり、9は黄褐色の硬砂岩、10は砂岩製である。11は大型の砥石であり、側面に著しい擦痕が残る。

(松島吉信)



第18図 木製品・砥石実測図 (1~7は1/4, 8~11は1/2)

## V 調査の成果

### 1. 古代景観の復原

富山平野は大河川によって形成された扇状地の複合平野と言いかえることができる。じょうべのま遺跡は黒部川によって形成された典型的な扇状地の扇端部に位置し、眼前に日本海が広がるという他地域にはほとんど例をみない環境を保有している。

古代景観の復原は往時の地理的な研究に寄与するばかりでなく、遺跡の成立と性格について考察する上で、きわめて重要な研究法であると考える。以下に、じょうべのま遺跡の古代景観復原にむけて、「杉沢」・旧河道・汀線・近世集落の変遷を分析法として論の展開を試みる。

#### (1) 「杉沢」の景観

黒部川扇状地の扇端部の自然景観は「杉沢」と呼ばれる、小規模な自然林によって特色づけできる。近年のは場整備によってその大多数は消滅してしまっている。現在残存しているのは国の天然記念物として指定をうけた吉原地区の「杉沢」のみである。この地区は昭和48年に指定をうけ、総面積は26,700m<sup>2</sup>に及ぶ。周囲はは場整備が完了しており、往時の景観をしのぶことはできない。

この吉原地区の「杉沢」には沢スギをはじめとする多くの植物が確認されている〔大田1977〕。沢スギはアシオスギと呼ばれる天然スギであり、島根・京都・福井・石川・富山・山形・秋田などの日本海側に主に分布するという。大田は「杉沢」の植生群を暖温帯・深山性・湿地性・陰地性の植物に大別を行なっている。暖温帯の植物としてはマツリョウ・カラタチバナ・オモトなどが確認されている。また、深山性の植物としてキンコウカ・オオバツツジ・ノリウツギなどが確認されている。さらに湿地性・陰地性植物としてはギボウシラン・サギソウ・セイタカなどの草本類に加えてシダ類も確認されている。

一般にスギの生育に良好な条件は年平均気温が8℃～16℃、降水量が年間に2,000～2,500mmのかなり湿润な地域とされ、土壤は通気性・保水性・膨軟性に富むものという。「杉沢」はこのような条件からみる限り、必ずしも適合した環境にあるとは言い難く、沢スギの環境への順応〔大田前掲〕と人工的な淘汰〔深井1977〕という解釈が試されている。いずれにせよ、沢スギを主体とし、前述のような雜木が混生した植生群が近年における「杉沢」の景観であったといえる。

深井は明治43年に作製された地形図を利用し、往時における沢スギの分布について検討を行なっている〔深井前掲〕。黒部川扇状地の扇端地帯に広がり、「西は袖沢・上飯野新から東狐を経て下飯野・五十里に至る自然堤防帯から東側で、その東端は入川に限られる標高15m以下の海岸寄りの地帯で、砂丘帯のない海岸に面し、扇状地の形成後早くから海岸侵食の行われたところ」とされている。は場整備が開始される直前の昭和43年に測量された1:25,000の地形図から「杉沢」の分布を眺めると(第9図)、ほぼ同様の分布状況を確認することができる。近年における農業技術のめざましい進歩にもかかわらず、は場整備による微地形の根本的な改変がなされるまで、杉沢の開発は基本的にはなされなかった事実をよみとることができる。

黒部川扇状地の東端にあたる朝日町大屋では藤井昭二らによってスギを主体とするいわゆる埋没林が検出されている〔藤井1965〕。これは<sup>14</sup>C年代測定法により、1,560±110年 B.P. という年代が同定されている。また、水系を異にするものの別の特別天然記念物に指定されている魚津市の「埋没林」ではスギを主体とした樹根が検出され、<sup>14</sup>C年代測定法により1,960±70年 B.P. という年代が提出されている〔木越他1965〕。また、国

道8号線の横脚工事中にもスギの樹根が出土しているという〔深井前掲〕。近年では吉原沖約700m程の水深30~40mの地点から「沈水林」が検出されている〔藤井他1983〕。この樹種構成はヤナギ類・ハンノキイタ・コナラなどの落葉樹林が主体になっており、前者とは異なった様相を提示している。藤井による富山平野を主体としたいわゆる埋没林の集成をみると〔藤井1982〕、扇状地の端部から検出される例が比較的多いものの、杉沢のようなスギを主体とした樹種構成は極めて特異なものとして考えることができる。また、その成立時期については資料的な制約があるとはいえ、火屋や魚津の例を積極的に評価すれば、約2,000年前までにさかのぼりうるといえる。ひとたび近年のような沢スギが成立すると、その立地条件などから根本的な開発はなされ難い状況であったと考える。

## (2) 旧河道の変遷

杉沢の分布と成立要因は、黒部川の旧河道との密接な関係が研究されている〔深井前掲〕。この旧河道についてはすでに多くの研究が公表されており、中山正民によってその研究史が総括されている〔中山1981〕。

吉川虎雄は奈中写真を題材として扇状地の微地形について考察を行なっている〔吉川1952〕。扇状地内で観察された放射状に走る数条の淡色部について「放射状凹地帯」と認定した後に、黒部川の洪水の際に形成された流路という解釈を行なっている。吉川が提示した資料によれば、黒東地域で舟見野段丘に沿って北流し、古黒部に至る旧河道とこの流れが下山付近で分流し、吉原と木根に至る旧河道が示されている。

深井は空中写真、地形図、古地図といった資料の検討をとおして旧河道の図上復原を行なっている〔深井1966〕。結果として、「現河道沿いの地帶は、最近までたびたびの洪水の害をうけた地帯を代表し、黒東地域の舟見野隆起扇状地崖下に主要河道の一つがあった時期はおそらく天文4年(1535年)7月1日の大洪水までで、それ以降は次第に主要河道は西側へ移動した」という見解に至っている。深井のいう不明瞭な旧河道帶は墓ノ木から舟見野段丘に沿って北流し古黒部に至るかなり幅広な河川を主体とし、新屋から神林へ、小揖戸から道市の方へ。若狭新から木根へ向かう比較的小規模なそして3本の直線的な旧河道を示している。

この後深井は同様の方法論に立脚し、さらに詳細な「旧河床帯」の提示を行ない〔深井1977〕、概略的な傾向として、主要流路の西側への移動を把握している。

近世に描かれた古地図からは扇状地内を網目状に流れる状況を理解できるのみであり、流路の確定的な位置を読みとることは難しい。1982年に刊行された「沿岸海域土地条件図黒部」の1:25,000の地形図には1m単位の等高線が描かれており、かなり具体的な微地形を読みとることができる(第19図)。この凹帯をII河道とした場合、前述の深井による旧河道とおおむね一致する。ただし、この形成年代については図面上から読みとることができない。

黒部川本流が近世において、東側から漸次西側へ移動し、近世の治水事業によって現在の位置に固定された状況は、深井らの研究によって示されており、また、東側海岸における海岸侵食の進行度合からみても首肯できる。しかし、近世以前における流路の変遷をたどることは難しい。じょうべのま遺跡が位置する田中の海岸部は調査でも明らかなように、遺跡形成後、直接的な洪水などの影響はみられない。深井らによる研究ではこの地域が自然堤防帯として示されており、遺跡の立置に重要な要因であったことを読みとができる。

## (3) 汀線の復原

黒部川扇状地の汀線は近年、加速度的に進行し東部海岸一帯ではかつて存在していた砂浜がほとんど消滅している。昭和初期から昭和20年代にかけては地方公共団体による小規模な防波堤建設がなされていたが、昭和35年からは建設省直轄事業として順次、近代的な工法による侵食対策工事が実施されている〔建設省

1979)。

この汀線の変化については大きくふたつの方法論によって研究がなされている。ひとつは古図や地形図の判読を利用した研究であり、他のひとつは扇状地の形成要因に着目した研究である。

前者には山田時大らによる研究が公表されている〔山田他1978〕。これによれば黒部川河口部にあたる両岸・芦崎・荒俣・生地付近では過去126年間に多少の変動はあるもののほとんど変化はみられない。最も侵食の度合が激しいところは朝日町元尾敷・大屋・入善町神子沢・五十里付近であり、126年間に240~250mの汀線の後退がおこっている。その他の黒部川河口より東側の海岸部ではおおむね120~130m程の海岸侵食が算出されている。黒部川河口より西側の黒部市経立野・堀切・石山などでは汀線の後退がやはり認められるものの、10~20m程度の距離であり、東側とは様相を異にする。

後者では藤井昭二らによって研究がなされている〔藤井他1983〕。これは扇状地の形成原理を考えた場合、汀線までの距離は等しくなるはずという前提に立脚し、水深40mの地点に過去の汀線の設定を行なっている。水深40mの地点では扇頂からの距離が約13.5kmとなる。大屋・横山・田中地区の冲合には傾斜のゆるやかな海底地形がのびており、水深40mあたりまでこの緩斜面を追うことができる。よって黒部川扇状地の形成時における汀線はこの40mの地点に求める考察には首肯できる。ただし、この方法論による限り汀線の変遷過程を時間単位で追うことは難しい。

汀線を確実に同定しうる資料は、過去約100年間における汀線の後退と、吉原沖で検出された「沈水林」であろう。前者では約100年前で水深が4m付近に汀線が設定される。「沈水林」は水深が約40mの位置で検出されており、ここをほぼ1万年前の汀線とし、近年における加速度的な侵食状況を加味して、時間(X・年)と水深(Y・m)の間には $Y^2 = 4/25X$ という関係が成立する。この式から約1,000年前の汀線を求めれば、水深12.7m付近に設定することができ、田中地区で約350m現在より冲合に汀線の設定が可能となる。

#### (4) 近世の集落

1967年に刊行された入善町誌では近世における集落別の村高が集成されており、その変遷過程をたどることができる。

段丘上に位置する旧舟見村では、正保3年(1646)に885石であった村高が、天保11年(1840)には約1,137石へ増加している。寛政年間に着手されたとする「愛本新用水」によって、水利が改善されたことを主因と考える。概して、黒部川左段の段丘上では早い時期から集落の成立をたどることができるものの、右岸の段丘上は「雲雀野」という俗称からも考察できるように、長い間、原野に近い状態であった。

扇尖部に位置する旧新屋村では、正保年間で500石であった村高が寛文10年(1670)には695石に、慶応年間には723石に増加している。旧小摺戸村では、明暦2年(1656)で135石の村高が慶応年間には290石に増加している。さらに、旧柄山村では、正保年間に約408石であった村高が慶応年間には約841石へ増加している。この地域での村高は例外なく、大幅な増加を確認できるが、扇状地内の用水設備の普及が主要な要因として想定できる。

扇端部の旧横山村では正保年間で約469石、享保18年(1733)から慶応年間までは約552石で変化がみられない。旧八幡村では正保年間で約256石、寛文年間から慶応年間までは272石で、やはり変化がみられない。旧吉原村では明暦2年(1656)で557石であった村高が寛文年間に821石へ増加し、以後変化がみられない。このように、この地域の村高は一般的に、近世においてほとんど変化が認められない。

近世の新山開発は段丘上と扇尖部で活発であったが、扇端部では開発がほとんど進められなかった状況を窺うことができる。「杉沢」は近年のは場整備まで、新田開発にとって支障であったと考える。

## (5) 古代景観への接近

これまでに、黒部川扇状地を構成する自然・人文地理的各要素について検討を試みてきた。黒部川扇状地自体は地形的に大きく3枚の扇状地面に分類されており、じょうべのま遺跡をはじめとする古代から中世にかけての遺跡は、最下位に位置する新扇状地の扇端部におおむね分布しているといえる。

扇端部の地理的景観は「杉沢」で代表されよう。昭和40年代後半に実施されたほ場整備によって、大半が姿を消したものの、スギを主体とし、わずかながら雑木を混じえたこの「杉沢」は湧水帯という立地条件によって成立しており、積極的に解釈するならば、魚津の埋没林までにさかのぼることができ、古代から中世にかけてはすでに、近年に近いような状態が成立していたと考える。

湧水帯を形成した黒部川の旧河道は、微地形の判読や古地図の検討によってその変遷が追求されている。近世において、より東側に本流があり、支流が網目状に新扇状地内を流れていた状況から、本流が漸次西側へ移動し、現在の位置に近代の治水事業によって固定された。東側海岸での汀線の後退からも、この変遷過程は首肯できる。古代から中世にかけての本流の位置は同定できないものの、網目状の流路が新扇状地内をかけめぐらしており、かなり不安定な平野であったと考える。

前述のように、黒部川扇状地の東側では著しい海岸侵食が認められる。過去100年間の侵食状況を検討した研究によれば、100m以上の汀線の後退が提示されている。近年発見された吉原沖の「沈木林」は水深40mの地点で検出されており、約1万年前という年代が算出されている。これらの研究と、近年における加速的な侵食状況から考察すれば、古代から中世にかけての汀線は水深12.7m程に設定することができ、じょうべのま遺跡付近では約350mの沖合に汀線が存在したことになる。

黒部川扇状地内の集落について、近世における変遷過程をみた場合、扇尖部では各村々の村高に著しい増加が認められ、新田開発と集落の戸数の増加を考えることができる。これに対して、扇端部に位置する集落では、村高にはほとんど変化が認められない。この主たる要因として、「杉沢」の開発の困難さを考える。遺跡の分布が示すように、扇端部には早い時期から集落が形成されていたものの、地理的制約などから個々の集落が発展・成長することはなかった状況を窺うことができる。

さて、じょうべのま遺跡の微視的な古代景観については岸本雅敏の研究がすでに公表されている(岸本1984)。分析法は汀線の復原、遺跡内で検出された川跡の評価、「沢杉地帯」の設定であり、「古代には沢杉林にかこまれた中にじょうべのま遺跡が存在し、それに接して東を川が流れ、やや離れた北方に日本海を望むことができた」光景の復原を行なっている。とりわけ、今回の調査で明らかになった川跡は古代景観の復原に大きな意味をもつ。この川跡は漸次、西側へ移動したと考えられ、古代においても中世においても常に、建物との位置関係が重要視され、生活により密着した存在であったはずである。

黒部川扇状地という地理的なまとまりで大まかな古代景観の素描を行なったところ、「杉沢」や旧黒部川といった各種の自然的制約を抽出することができた。古代から中世にかけての遺跡の立地は、このような自然的条件を背景とするが故に、扇端部に分布が認められるとも考えられる。

金田章裕は東大寺領庄園の構造的性格について考察を行なっており、新川郡の諸庄園については扇状地端部の安定性と水利の便を自然的立地条件として指摘をしている(金田1977)。じょうべのま遺跡が古代の「庄園」と密接な関係で位置づけされることは議論の余地がない。金田が指摘するような自然的条件の基にじょうべのま遺跡が成立したとしても、黒部川扇状地は「杉沢」や旧河道が示すように、歴史的変遷の中できわめて不安定であった。このように考えれば、じょうべのま遺跡の成立とその性格については、むしろ、海浜地帯における特性に着目して追求しなければならないと考える。この点において、汀線からの距離と製塙土器に大きな評価を見出すことができる。(松島吉信)



第19図 黒部川扇状地の微地形(1:25,000沿岸海域地形図・沿岸海域土地条件図、黒部より)

## 2. ジュウベのま遺跡における土器製塩

ジュウベのま遺跡出土の製塩土器については、調査概報のなかでおおよその位置づけを行い（岸本1982a），さらに「富山県における土器製塩の成立と展開」について論じた旧稿においてその意義づけと土器製塩の復原を試みた（岸本1983）。ここでは上記の旧稿に依りながら、県下における土器製塩のあり方を要約し、ついで、出土した製塩土器からこの遺跡における土器製塩について素描してみたい。

### (1) 富山県における土器製塩

#### (a) 製塩土器の型式と年代

**製塩土器の型式** 能登式製塩土器には台付・棒状尖底・平底・丸底の四つの型式が知られている。石川県能登地方でみられる倒立形の脚台付製塩土器は、今のところ県下で発見されていない。製塩土器はその大部分が棒状尖底製塩土器であって、これに平底製塩土器が加わる。こんにち県下で知られる18箇所の製塩土器出土遺跡のうち、前者が14遺跡から、後者が6遺跡から出土している（第2表）。つまり富山県の製塩土器は能登式製塩土器の分布範囲内にあり、その南東の周縁部を占めている。

**製塩土器の年代** 棒状尖底製塩土器は、6世紀末ないし7世紀初頭に出現し、7世紀末ないし8世紀のごく初頭まで存続する。つまり、ほぼ7世紀代のものといえる。その初現は、氷見市九殿遺跡・立山町辻坂の上遺跡例などであり、終末は上市町東江上例である。他方、平底製塩土器は、本書でとりあげるジュウベのま遺跡例が平安時代前期、朝日町の道下遺跡ほか3遺跡例が平安時代中期（10世紀後半）ごろである。

なお、小杉町南太閤山1遺跡例は奈良時代後期にさかのばる可能性がある。

#### (b) 製塩土器の分布と出土遺跡の性格

**製塩土器の分布** 製塩土器の出土遺跡を地域別にまとめれば、以下の4群に大別しうる（第20・21図）。

A群：氷見・高岡地方の富山湾沿岸地帯に分布する一群……氷見市九殿・大境・萩田遺跡ほか2遺跡。

B群：富山平野西部の丘陵地帯に分布する一群……………小杉町小杉流田No.6・7・21遺跡ほか2遺跡。

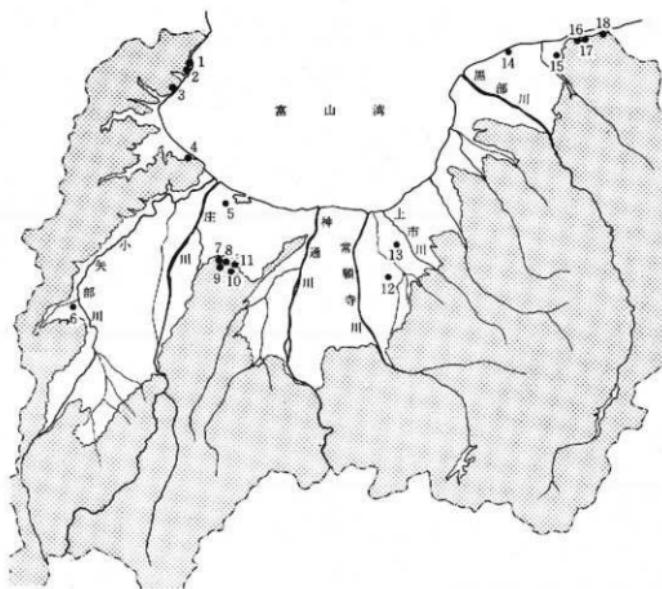
C群：富山平野東部の山麓地帯に分布する一群……………立山町辻坂の上遺跡、上市町東江上遺跡。

D群：県東北部の日本海沿岸地帯に分布する一群……………入善町ジュウベのま遺跡、朝日町道下遺跡ほか。

以上のはか、砺波平野の最西端に近い小矢部市でも一箇所、桜町遺跡から出土している。

**立地からみた遺跡の型と性格** 製塩を行うには海水と燃料の薪を容易に得られることがその要件となる。こうした要件をそなえた場所とは、海浜の背後または至近地に山林の存在する自然地形にはば限られることがある。この点をふまえて県下の製塩土器出土遺跡を一瞥すると、その立地から二つの型にわけることができる。そのひとつは、海浜に面しているか又は至近地にあって、背後に燃料供給源の山林をひかえている遺跡であり、これを「沿岸型」とよぶ。他のひとつは、山林が存在することはあっても海浜から遠く隔てられた内陸部の遺跡であり、これを「内陸型」とよぶ。また沿岸型の諸遺跡には、海浜に面している遺跡と海浜から数百メートルないし1・2キロ離れた遺跡との二者があり、前者を「沿岸型a類」、後者を「沿岸型b類」とする。こんにち明らかに土器製塩遺跡そのものとみなしうるのは、前者に該当する氷見市九殿遺跡のみで氷見市大境・萩田遺跡などの沿岸型b類の諸遺跡は、その近辺に土器製塩遺跡の存在が推定されるものである。以上から、沿岸型遺跡の分布地域とは、土器製塩の行われた蓋然性のきわめて高い地域であると言つことができる。

他方、内陸部出土の製塩土器は、海浜地帯から塩をつめて搬入されたものであり、塩の運搬容器でもあつたと考えられる。言いかえれば、内陸型の諸遺跡とは、塩の供給・消費地であると考えてよい。



第20図 富山県製塙土器出土遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	遺跡の型 沿岸型 内陸型	地盤 砂質 粘土質	遺跡の性格	出土地区・道標	文献
1	九穀遺跡	永見市豪宇九穀	沿岸型	○	土器製造遺跡	X1-2Y4-5(伊社?)ほか	〔東見高松歴史クラブ1964〕・〔西條1975〕
2	大坂遺跡	大坂	〃	○	泥窯遺跡	第3層か?	〔沼田1963〕・〔湊1971〕
3	萩田遺跡	萩田	〃	○	聚落遺跡		
4	山岸遺跡	高岡市太田町守山岸	〃	○	聚落遺跡		〔岸本1976-1978〕
5	吉原田遺跡	中曾根郡吉原田	〃	○	〃		〔間坂1966〕
6	桜町遺跡	小矢部市桜町字塗田	内陸型	○	〃	土坑内ほか	〔安念はか1985〕
7	小杉淀川No.7遺跡	射水郡大門町水戸田	〃	○	〃	第14号穴ほか	〔上野はか1982〕
8	小杉淀川No.6遺跡	〃	〃	○	〃	第3号住居跡・第1号穴	〔上野はか1982〕
9	小杉淀川No.21遺跡	小杉町青井谷	〃	○	石器・陶器・須恵器 工入聚落遺跡	第1号住居跡の前方の谷腰 第2・7号住居跡、第2・3・5 号2段階遺跡(庄屋跡)	〔上野・橋本1983〕 〔上野はか1984〕
10	上野遺跡	上野	〃	○	聚落遺跡		
11	南太陽山1遺跡	南太陽山	〃	○	堅穴住居跡-1	C地区3号住居跡周辺	〔開・久々1984〕
12	江坂の上遺跡	中新川郡立山町	〃	○	川跡	A地区溝SD03内	〔岸本・開・山本1985〕
13	東江上遺跡	上布町東江上	〃	○	聚落遺跡	堅穴住居跡周辺か?	〔久々1981-1982〕
14	じょうべのま遺跡	下新川郡入善町田中	沿岸型	○	庄家跡	堅穴住居跡SK19とその周辺	〔岸本1981-1982〕
15	道下遺跡	朝日町道下	〃?	○	聚落遺跡	C地区川跡 SD049 K地区	〔岸本・山本1982〕
16	馬場山D遺跡	〃	〃	○	〃	溝SD01、柱穴内ほか	〔橋本・松島1984〕
17	境A遺跡	〃	〃	○	〃	(遺物包含層)	〔橋本1985〕
18	境金剛遺跡	〃	〃	○	〃	(遺物包含層)	〔國上1979〕

第2表 富山県製塙土器出土遺跡地名表

**沿岸型と内陸型の地域的分布** 以上の理解をふまえて沿岸型と内陸型の諸遺跡の地域的分布をみると、沿岸型の分布は、A群とした水見・高岡の富山湾沿岸地帯とD群とした県東北部の日本海沿岸地帯との二地域に限られている。また内陸型は、富山平野中央部の東西にそれぞれC群とB群が分布し、さらに衛波平野の西端に桜町遺跡がみられる（第20・21図）。ちなみに内陸型の遺跡から現海岸線までの直線距離は、B群の小杉流團内3遺跡が約8.3km、C群の辻坂の上遺跡が約8.3km、桜町遺跡では約20kmである。

**二つの土器製塩地帯** 分布にみられるこのような差異・偏在性は、端的にいえば塩の生産と消費における地域間の差異としてとらえることができる。すなわち、土器製塩は主として沿岸型の分布圏とした上記の2地域において展開したと考えられるのに対し、富山平野の中央部はその沿岸地帯を含めて塩の消費地の域を大きくするものではなかったと考えられる。近世越中の製塩地帯がやはり上記の二大土器製塩地帯と合致しているのも単なる偶然ではなく、ともに海浜の背後に燃料供給源をひかえ、製塩に適した自然的条件を有することに起因すると考えてよい。

### (c) 富山県における土器製塩の成立と展開

**土器製塩の成立** おそらく古墳時代後期後半に七尾湾沿岸で能登独自な棒状尖底製塩土器が出現し、それによる土器製塩が能登半島一円、とくに東岸一帯に拡散する。この動向のなかで6世紀末ないし7世紀初頭の時点で、能登の南東の一画を占める水見地方へも土器製塩が下り、拡大し、一定の定着をみた（第21図）。

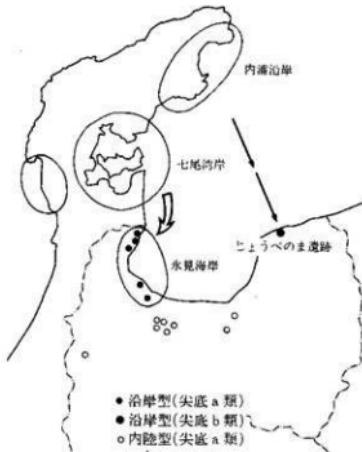
**土器製塩の展開** 水見地方に成立した土器製塩は、沿岸型遺跡の分布と内陸部出土の製塩土器の年代幅を考えあわせれば、能登からの一時的・局地的な波及にとどまつるものではなく、一定の定着性と面的広がりをもって展開したと考えてよい。水見・高岡地方の富山湾岸では、おそらく7世紀代を通じて棒状尖底製塩土器による土器製塩が盛行し、その間、桜町遺跡をはじめとする内陸部の諸遺跡へ塩が供給されたと考えられる。他方、平安時代には、朝日町を中心とする県東北部の日本海沿岸で平底製塩土器による土器製塩が盛行した（第22図）。なお、水見地方では8世紀以降にも土器製塩が存続したと考えているが、確実な資料はない。小杉町南太閤山I遺跡出土の平底製塩土器の破片からわずかにそれを窺うるにすぎない。

### (2) じょうべのま遺跡における土器製塩

じょうべのま遺跡の2種の製塩土器は、とともに川跡から出土したものであり、出土状況から土器製塩を裏づけることはできない。しかしこの遺跡は沿岸型の遺跡であり、先にD群とした土器製塩地帯に含まれる。旧稿で論証したように至近地で土器製塩が行われたと考えてよい。

#### (a) 棒状尖底製塩土器による製塩

この遺跡の棒状尖底製塩土器は、県下出土の専用のそれとは異なり、大型・厚手である。能登の棒状尖底製塩土器は小型・薄手の「尖底a類」と大型・厚手の「尖底b類」に細分され、後者は能登東北部の内浦沿岸にその分布が限られるという（榎本1981）。上記の土器は富山県下では唯一、この尖底b類に該当するものである。したがって、尖底a類の分布圏で



第21図 棒状尖底製塩土器の系統と分布

ある氷見地方から富山湾岸づたいに土器製塩が東漸し、やがてこの地に達したとは考えがたい。能登東北部に特徴的な尖底b類という土器型式に加えて、じょうべのま遺跡の地理的位置からすれば、富山湾をへだてて対岸に位置する両地域の海浜集団が海上交通を介した交流をもつ過程で、能登東北部の沿岸地帯から直接この地域に土器製塩が伝播したものと推定される（第21図）。尖底b類は七尾湾岸で出現した尖底a類が能登東北部で独自な発達をとげ、大型化したものと考えてよいから、棒状尖底製塩土器のなかでは後出的なものとみなしうる。とすれば、じょうべのま遺跡のそれは、おそらく7世紀代でも後半に下るものであろう。

以上のように考えれば、氷見地方での土器製塩の成立よりもやや遅れて、県北東部の日本海沿岸地帯の一部でも土器製塩が成立していたものと推定しうるのである。しかしそれがどの程度の定着性をもっていたものか、現状ではわからない。ただこの地域の自然的・歴史的情条件からみて、能登の一画を占める氷見地方ほどに広汎な土器製塩の展開はみられなかつたものと推察されるだろう。県北東部において土器製塩が定着し盛行るのは、以下のべるよう、黒部川扇状地（黒部平野）の開発が活発化する平安時代以降に至つてからである。

#### (b) 平底製塩土器による土器製塩

平底製塩土器は伴出の須恵器からみて庄家跡の存続時期のものと考えられ、9世紀代から10世紀前半にかかるものである。海に面する庄家の至近地では同時期に製塩が行われていたことは、庄園經營の問題を考えるうえからも特に注意する必要がある。

**じょうべのま遺跡における塩生産の位置** じょうべのま遺跡では、第一に燃料の問題を考えたとき、背後に山林をひかえていない。周辺一帯に「杉沢」地帯がみられたけれども、それは「塩木山」としての役割を一部はたしても「塩木山」そのものでないから、燃料供給源としての限界をおのずともっている。第二に平安時代前期という時代性を考慮して「塩浜」がすでに成立していたと想定したばあいにも、この地では塩浜の形成可能面積にかなりの制約があったと思われる。第三に、庄家跡から出土した「上白米五斗」と墨書きした2点の木簡が端的に示しているように、庄家において収取された生産物が主として米であったことは疑いないから、その庄園は農業生産に基礎をおくものであったとみなしうる。とすれば、そこでの塩生産は小規模なものであって、漁撈その他の非農業生産諸部門とともに、農業生産に対して副次的・従属性の位置を占めていたものと考えてよいであろう〔岸本1983〕。その意味では、同時代の西日本の瀬戸内諸地域で成立していた「集中的大規模塩生産」に対比すべくもないが、またそれを過小に評価することもできない。

庄家の至近地で製塩が行われていたことは、塩の供給源がその庄園内に存在したことを単に意味するだけ

でなく、耕営労働力の編成を含めた庄園經營において重要な意味をもっていたに違いない。旧稿で述べたように、古代にはさまざまな労働力編成にあたって給付物が支給されており、塩はそうした「労働財源（原始貨幣）」のひとつであった。それゆえ大規模な平野の開発を推進するには、塩を含めた労働財源を保有していることがその前提となる。ここに在地権力が製塩技術を在地に導入・移植し、さらにその生産と流通をも掌握しようとする内的契機が生まれる。県北東部において平底製塩土器による塩生産が遅くとも平安時代前期にあらたに成立した背景については上述のことをふまえて理解すべきであろう。（岸本雅敏）



第22図 型式別にみた製塩土器の分布

### 3. 中世の遺物について

#### (1) 中国製磁器について

最近の研究動向 近年、中世の集落跡や城館跡の発掘によって、多くの輸入陶磁器が出土している。このため、従来、主に伝世品を対象として、一部の陶磁器研究者を中心に進められてきた研究も、ここ10年間はどの間に飛躍的に増大した出土品の整理・研究によって、中世における交易史や社会経済史の研究に非常に重要な役割りを果すようになってきている。また、基礎的な作業として、全国的な規模での分類と編年が進みつつある〔日本貿易陶磁研究会1981・1982・1983・1984など〕。特に陶磁器輸入の玄関口となった北九州では、博多や太宰府などで膨大な量の輸入陶磁器が発掘されており、量的に主体を占める碗・皿類については詳細な型式分類がなされ、共伴する国产陶・土器類の編年と、紀年銘資料によって年代比定も可能になっていている。

富山県でも全国的な動向と同じく、中世の集落跡・城館跡の発掘では必ずといってよいほど出土している。以前は、中国製磁器の出土を報じる程度であったが、じょうべのま遺跡・地区の遺物の報告で、橋本正氏は、はじめて実測図を明示し、詳細な分析を加えて報告を行なった〔橋本1974〕。この報告は、輸入陶磁器の研究を考古学的な手法を用いて行なった、先駆的な業績として高く評価される。その後、北陸自動車道関係で調査された立山町若宮B遺跡、上市町神田・江上B遺跡や、ほ場整備に伴って調査された上市町弓庄城跡などでも出土し、資料は充実してきている。また、北陸地域では、ほぼ普遍的に共伴する珠洲系陶器の編年が確立しつつあるため〔吉岡1981など〕、年代比定も割合確実に行える状況にある。

周辺遺跡出土の中国陶磁器 黒部川東部地域でも、じょうべのま遺跡をはじめ数か所で、中国製磁器の出土が報告されており、ここでは簡単に概観しておきたい。

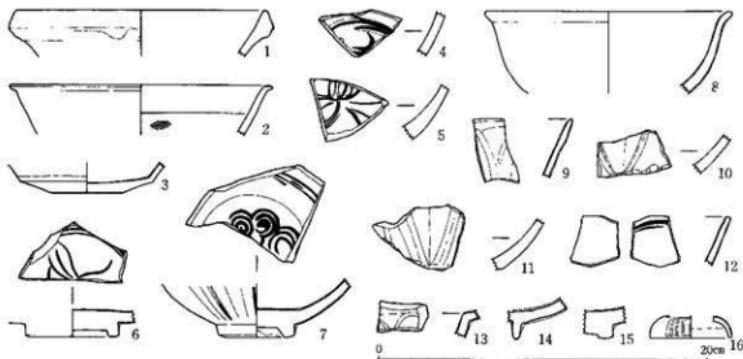
○入善町じょうべのま遺跡・地区〔橋本1974〕 掘立柱建物や溝が検出されている。青磁では龍泉窯系の鍋蓮弁文碗が比較的多く、他には同安窯系と考えられる模描文皿、青白磁合子、白磁玉縁碗、白磁皿などが出土している。共伴する珠洲系陶器は、II期（13世紀前半～中項）を中心でV期のものも若干ある。

○朝日町館の城跡〔酒井1978〕 居館跡と考えられ、青磁が出土している。

○朝日町大寺寺跡〔同上〕 寺院跡と考えられ、青磁が出土している。

○朝日町道下遺跡〔橋本・松島1984〕 遺跡の性格は不明であるが、龍泉窯系の青磁蓮弁文碗・白磁玉縁碗が出土している。共伴する珠洲系陶器はI～V期にわたり、年代は12世紀後半～15世紀頃である。

○朝日町柳田遺跡〔橋本他1975〕 これも遺跡の性格ははっきりしない。中国製磁器は、青磁・白磁・青白磁が出土している（第23図）。白磁は、碗と皿がある。1は、丁線状口縁の碗である。釉は乳白色を呈し、胎土はやや軟質。2は、口縁端部が外方に折れる。口縁部内面には沈線がめぐり、模描波状文が施される。釉・胎土とも灰白色を呈する。3は、体部中位で屈折する白磁皿である。釉は、透明度が高くややオーリー色をおびた灰白色である。外面は体部上半部にのみ施釉する。焼成は堅緻で、胎土は灰白色を呈する。青磁は、碗（4～12・15）・鉢（13）がある。青磁碗は、体部内面及び内底面に片彫りによる蓮華文などを施すいわゆる割花文碗（4～6）、体部外面に鍋蓮弁文を有するもの（7・9～11）、体部内外面無文のもの（8）がある。4は、透明度の高い釉で、オーリー色を呈し、貴人が多くみられる。6は、内底面に蓮華文を施す。高台外面および下部の一部にまで釉がかかる。焼成は良く、胎土の色調は灰白色である。7は、内底面に型押しによると考えられる花文が施されるが、やや不明瞭である。釉は灰青色で、荒い質入がはいり、高台の下部まで施釉される。8は、口縁部が外反し、端部は丸みをおびる。釉は透明度の高い青緑色で、貴



第23図 朝日町柳川遺跡出土の中国製磁器 (1/3)

入がはいる。焼成堅緻、胎土は灰色である。

12は、口縁部輪花の小碗と考えられる。口縁部内面には沈線がめぐる。釉は水色、胎土は灰白色を呈する。13は、外面に蓮弁文を施す鉢である。釉は、明るい青色で荒い質入がはいり、厚めにかける。14は鉢と考えられる。高台下端が踏台となる他は全面施釉である。釉は明るい青色で厚くかける。16は青白磁合子の蓋である。外面には細い蓮弁文を施す。

以上の中国製磁器の年代は、1～7・9～11・15・16などは12世紀後半～13世紀中葉のものと考えられる。12～14はこれより新しく、14～15世紀に降るものであろう。

○朝日町境A遺跡〔松島1985〕 北陸自動車道建設に関連して行なわれた昭和59年度の調査で、龍泉窯系の青磁劃文直碗・青磁蓮弁文碗・同安窯系の描描文皿などが出土している。

## (2) 陶磁器の編年

**中国製磁器の年代** 中国製磁器については、前述したように、北九州地域を中心に編年が進みつつあり、特に平安・鎌倉時代については、以下のような時期区分の見通しがたてられている〔横田・森田1978〕。

I期 (8世紀後半から11世紀初頭)

白磁I類と越州窯系青磁の時期。

II期 (11世紀中葉から12世紀初頭)

I期とIII期の過渡的段階。確実に白磁碗II・III・IV・V・VI・VII、皿II・V・VI類のみで形成された時期。

III期 1小期 (12世紀中葉から13世紀初頭)

同安窯系青磁および龍泉窯系青磁碗I-2・4類（内面に片彫りの草花文や飛雲文を施すもの）の割合が大きい段階。

2小期 (13世紀中葉)

白磁が瓶端に減少し、青磁碗I-5類（外面に浮き彫り風の蓮弁文を施すもの）が大部分を占める時期。白磁碗IX・皿IX（ロハゲのもの）および龍泉窯系青磁III類（高台先端を除いて全面的に施釉するもの）が出現しはじめる。

3小期 (13世紀後半から14世紀中葉)

青磁は同安窯系が少なくなり、龍泉窯系Ⅲ類が最も多い時期。白磁Ⅳ類が1割を越す。

じょうぶのま跡C・K地区出土の中国陶磁をみると、白磁A類（V<sub>4</sub>類）、C類（IV<sub>2</sub>類）などは、比較的古い段階に位置づけられ、12世紀前半にまでさかのばる可能性がある。これに少しおくれて、同安窯系青磁やいわゆる劃文碗である碗A類（I<sub>2</sub>.4類）・皿などが出現する。龍泉窯系青磁碗B<sub>1</sub>類（I<sub>1</sub>b類）は、鑄造弁文を有するもので、さらに時期がさがり、13世紀中頃に盛行するとされている。同じくB<sub>2</sub>類は、弁先の丸い運弁文を有するもので、横田・森田編年ではⅢ類とするものに類似し、時期は13世紀後半から14世紀中葉が考えられる。また、口縁部外面に雷文帶を有する青磁碗が表採されているが（第24図）、これは14世紀末から15世紀頃のものであろう〔上川1982〕。白磁四耳壺・青白磁合子・青白磁小壺などは、明確な位置づけは困難であるが、一応12世紀後半から13世紀前半と考えておきたい。

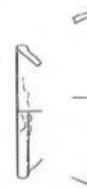
**国産陶磁器の年代** 国産陶磁器のうち珠洲系陶器については、吉岡康暢氏によって編年的な研究が進められており、I期からV期まで3段階7期に時期区分が行なわれている〔吉岡1981など〕。また各期は、紀年銘資料による実年代の推定もなされている〔吉岡1983a〕。I期は寺社窯出土品を基準資料として12世紀中頃～後半、II期は法住寺2号窯出土品を基準資料に13世紀前半～中頃、III期は馬頭窯出土品を基準資料に13世紀後半、IV期は法住寺3号窯出土品を基準資料に14世紀、V期は西方寺1号窯出土品を基準資料に15世紀前半にそれぞれ比定されている。またVI・VII期については、良好な資料は少なく15世紀後半から16世紀前半に比定されている。

上記の時期区分に従ってC・K地区出土の珠洲系陶器を検討してみる。まず、壺A類は、弧状に外反する口縁部と、肩部に平行タキを施さずに無文とするところに特徴がある。壺B類も調整技法が共通している。時期的にはI期に含まれるものであるが、寺社窯出土上の典型的な形態のものに比べると、口縁部の外反度がやや弱く、端部が嘴状に下方へのびるものや内面に段を有するものがみられないなど、やや後出的な様相を示している。壺B類とした四耳壺もI期に位置づけられる。鉢のうちA類は、口縁部がゆるく内湾ぎみに立ちあがり、内面にオロシ目を特たないもので、I期の特徴とされる。量は少ない。鉢の主体を占めるB類は、体部がほぼ直線的に開いて口径が大きくなり、内面に間隔を開けてオロシ目を引くもので、II期の特徴を有する。壺A類は、口縁部が丸みをもち強く外反するもので、II期に含めておく。内面に密なオロシ目を有する鉢C類は、口縁部が肥厚して櫛振波状が施されると推定され、V期に比定できる。

土師質皿は、明確な時期区分はできないが、珠洲系陶器編年のI・II期に共伴する形態のものがほとんどである。このうちでは、回転糸切り痕を残し、台状の底部を持つものなどが相対的に古く位置づけられそうである。土師質皿A II類のうち、薄手の作りの第16図30は時期がさがる。瀬戸は、灰釉碗とオロシ皿があるが、このうちオロシ皿は、14世紀代のものであろう。

**時期区分** これまで行なった陶磁器の分類と年代比定をもとに時期区分をすると、第24図のように大きく3期に区分できる。第1期の中国製陶器は、白磁碗A・C類・龍泉窯系青磁碗A類・同皿・同安窯系青磁碗・皿・青白磁・白磁四耳壺などから成る。後2者は、第2期までさがる可能性もある。珠洲系陶器は、壺A類・壺B類・鉢A類など、I期に比定されるものである。第2期に属するものは、中国製陶器では龍泉窯系青磁碗B<sub>1</sub>類があり、珠洲系陶器は壺A類・鉢B類などで、II期に比定されるものである。土師質皿は、第1・2期の両期に伴ない、区分はできなかった。第3期は、龍泉窯系青磁碗B<sub>2</sub>・雷文帯青磁碗・珠洲系陶器鉢C類・瀬戸などから成る。土師質皿のうち1点のみ出土した新しい時期と考えられるものはこの段階に含めておく。

以上のように、3期に区分しえるが、陶磁器の大半は第1期と第2期のもので占められ、第3期のものは

白磁	青磁	(龍泉窑系)	(高安窑系)	珠洲系陶器	土師質皿
   	   	   	   	   	   
第1期(12世紀中頃-後半)	第2期(13世紀前半-中期)	第3期(14-15世紀)			

第24図 陶磁器の時期区分

ごくわずかである。それぞれの年代は、第1期が12世紀中頃～後半、第2期が13世紀前半～中頃、第3期はやや時期幅があり、14世紀から15世紀と考えられる。

L地区出土陶磁器との比較 C・K地区出土の陶磁器をL地区のそれと比較すると、若干差違が見い出せるようである。まず中国製磁器については、C・K地区がやや占く位置づけられる白磁碗が多く、L地区では第2期に中心をおく青磁赤文碗が多くみられる。また珠洲系陶器も、C・K地区ではI期に比定できる壺、甕類がめだつたに対してL地区ではII期に下がるもののが主体を占めている。土師質器では、比較的古く位置づけられると考えられるB・C類が、C・K地区でみられるのに対して、L地区では報告されていないことも指摘できる。吉岡康輔氏が指摘するように〔吉岡1983b〕、C・K地区では第1期(12世紀中頃～後半)にも比重が多くかかり、L地区では第2期(13世紀前半)が中心である。相対的にではあるが、C・K地区がやや古く、L地区が新しくなるという傾向がある。

### (3) 陶磁器の組成

遺跡から出土する陶磁器の組成は、その遺跡の性格や地域性を理解するうえで有効な指標になるとを考えられる〔日本貿易陶磁研究会1984〕。ここでは、本遺跡の陶磁器組成を、県内の遺跡をはじめ他地域の陶磁器組成と比較し、その特徴を抽出しておきたい。なお、陶磁器組成を比較する場合、厳密には、個体数を確認し、これによって比率を出すべきではあるが、より簡便で一般的に行なわれている、破片数を用いることとする。陶磁器の種類により、破片化の度合いに差が生じようが、大体の傾向は把握できよう。

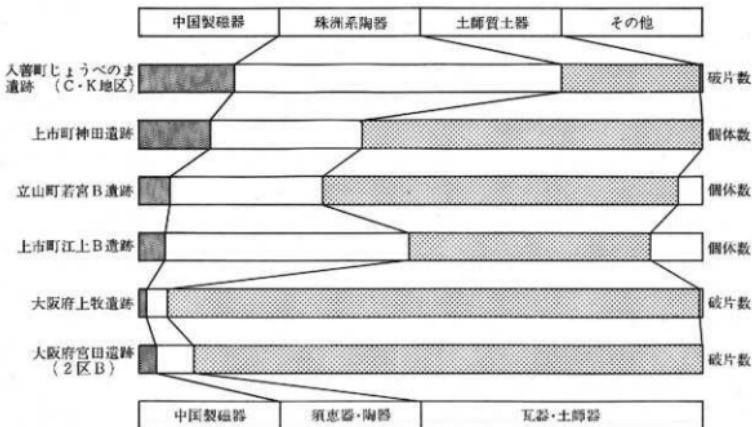
じょうべのま遺跡C・K地区で出土した陶磁器の種類は、中国製磁器・珠洲系陶器・土師質土器・瀬戸である。この破片数と比率は、中国製磁器76点(15.2%)、珠洲系陶器297点(59.6%)、土師質土器124点(24.8%)、瀬戸2点(0.4%)となる。

次に県内および近畿地方における、鎌倉時代の遺跡での組成をみてみたい。県内では、北陸自動車道の建設に伴って発掘調査が行なわれた、立山町若宮B遺跡・上市町神田遺跡・同江上B遺跡の報告で、口縁部・底部片による個体数をもとに陶磁器組成が作成されている〔宮田1984〕。遺跡の性格は、神田・若宮B両遺跡が村落領主層の居住地、江上B遺跡は名主あるいは小百姓の居住地と推定され、年代は、神田遺跡は12世紀後半から13世紀前半、若宮B遺跡は13世紀前半から14世紀、江上B遺跡は13世紀後半から14世紀が中心とみられている〔宮田1984〕。

陶磁器組成は、神田遺跡では中国製磁器22点(12.7%)、珠洲系陶器45点(26%)、土師質土器106点(61.3%)である。若宮B遺跡は、中国製磁器8点(5.6%)、珠洲系陶器39点(27.1%)、土師質土器91点(63.2%)、瀬戸・美濃6点(4.2%)である。江上B遺跡は、中国製磁器12点(4.7%)、珠洲系陶器111点(43.5%)、土師質土器109点(42.8%)、瀬戸・美濃など23点(9.0%)である。

以上3遺跡をじょうべのま遺跡C・K地区の組成と比較すると第25図のようになる。C・K地区と時期的に最も近い神田遺跡と比べると、中国製磁器の割合は比較的似るが、珠洲系陶器は、じょうべのま遺跡では60%近くを占めるのに対して神田遺跡では26%、土師質土器は、じょうべのま遺跡が25%弱であるのに対して神田遺跡では61%と、逆転している。また、わずかに時代の降る若宮B・江上B遺跡では、中国製磁器の比率が5%前後に減少するが、土師質土器の比率は神田遺跡と似る。

遺跡の性格の違いを陶磁器組成の対比から読みとるには、まだ資料不足であるが、これらの例をもとに、富山県内各遺跡出土の鎌倉時代の陶磁器組成の特徴を要約すると次のようになる。(1)中国製磁器の比率は5～15%で、時代が降るにつれて減少する傾向がある。(2)残りを珠洲系陶器と土師質土器が占める。(3)珠洲系陶器と土師器の比率は遺跡によりやや変化があるが、平均すると大体相なかばすると考えられる。



第25図 陶磁器組成〔宮田1984〕・〔橋本久和1984〕から作成

これを西日本における陶磁器組成の代表例として大阪府高槻市内の宮田(2区B)・上牧両遺跡と比較すると、高槻市内の遺跡では、中国製磁器が1~2%と非常に少ない比率であるのに対して、瓦器も含めた土師質土器は、90%を大きく越える割合となり、富山县でのあり方と差異がみられる。中国製磁器の割合が低く、土師質土器が卓越する陶磁器組成は、北九州地域ではやや中国製磁器が増えるものの、西日本の集落遺跡での一般的な傾向のようである〔日本貿易陶磁研究会1984〕。

時代はやや下がるが、室町時代の陶磁器組成でも、西日本で土師質土器の占める割合が大きいのに対して、東北・北海道の城館跡では板端に少なく、中国製磁器が優勢になるという地域差が指摘されている〔小野1984〕。鎌倉時代における東日本での事例の報告がないので直接的な対比はできないが、富山县では、土師質土器と中国製磁器の割合がこの中間的な様相を示していると考えられる。

また、富山县での陶磁器組成の特徴として、鎌倉時代では、珠洲系陶器の占める比率が高いことが指摘できる。富山县も含めて、北陸東部地域は、珠洲系陶器の流通圏であり、かなり安定した供給がなされていることがうかがえる。

(山本正敏)

註① 分類は〔横田・森田1980〕を参照願いたい。

註② じょうべのま遺跡C・K地区では、平安時代前期を中心とする土師器がかなり多く混在していて、確実に中世にさがる破片のみに限定して数えたために、実際はもう少し増える可能性が強く、神田遺跡・若宮B遺跡・江上B遺跡では口縁部・底部片をもとに個体数を割り出したため一部重複の可能性が残るという〔宮田1984〕。このことから、珠洲系陶器と土師質土器の比率の差はもう少し縮まる可能性が強い。

## 4. 掘立柱建物について

**建物群の分布と特徴** C地区の建物群は、主として発掘区南半で検出されており、建物群の分布の中心は、南北に広がることが予想される。K地区の南側に隣接するL地区でも、建物群が集中して分布しており、これに統くものであろう。しかしながら、出土遺物の検討からは、C地区が12世紀後半に中心をおくのに対して、L地区では13世紀前半に中心があり、相対的にはあるが、わずかに年代差が認められる。建物群としてはC地区からL地区にかけてまとまりをもつと考えられるが、分布域内における、建物群の時期区分や配置・変遷など、より細かな分析が必要であり、今後の調査をまたなければならない。

C地区で検出された掘立柱建物の中で、柱穴配列のほぼ確認できたSB 050は、身舎3×2間に四面とも扉が付き、しかも扉の出の寸法が、南北と東西で標準に異なる形態のものである。これは、SB 053もほぼ同様な柱穴配置をもつと考えられ、C地区の建物の特徴になっている。富山県内での平安時代末期から鎌倉時代にかけての居館・集落跡で検出された掘立柱建物の柱穴配列は、小規模な建物を別にすれば、總柱の建物となるものがほとんどである。SB 050のごとき柱穴配列を示すものは例がなく、中世的な建物というより、古代的な様相を多分に残しているように思える。

**建物の方位** 近年考古地磁気の研究が進み、各地で測定例が増加してきている〔Hirooka 1971〕・〔広岡 1977〕。これによって、西日本における過去2000年間の地磁気永年変化曲線が描かれ、年代推定に利用されている。ここでは、C地区で検出された建物・柵の方位を、地磁気の永年変化曲線と比較してみることにする。建物・柵の方位は第3表に示すとおり、ほぼ真北をとるグループ(SB 052・053)と、3~4度西偏するグループ(SB 050・SA 054)に大きく2分できる。柱穴の切り合いから、SB 050→SB 052の新旧関係がみられるので、後者のグループが古く、前者のグループがより新しくなると考えられる。建物の年代は、周辺から出土した陶磁器の検討によって、12世紀中頃から13世紀中頃までと考えている。この頃の地磁気永年変化曲線のうち偏角の変化をみると、1100年頃は西偏約5度、1150年頃は約1.5度西偏し、1200年頃は約3度東偏している。すなわち、磁北は西から東へ移動しており、真北と磁北が一致するのは、ほぼ1170年頃と考えられている。これをもとに、西偏3~4度のグループを1100年と1150年の間に位置づけ、ほぼ真北を示すグループを1170年頃に比定するという単純な年代比定を行なうつもりはないが、磁北の変化と、建物の新旧関係による主軸方位の変化の方向が一致していることは注目される。要するに、建物の主軸方位の決定を、磁北をもとに行なっている可能性が強いことを指摘できる。また、遺物の年代と、建物主軸の方位を地磁気の永年変化曲線にあてはめた場合、少しおれが生じており、これをどのように理解するか、今後の課題として残る。

**建物の規模** 富山県内の掘立柱建物については、北陸自動車道関係の調査報告の中で、分析が行なわれ〔鶴本正春1984〕、その建物規模から居住者の性格づけの試みもなされている〔宮田1984〕。これらの成果を参考に、

遺構名	柵・柵の方向	方位	柱間数	周囲m (尺)	柱間m(尺)				備考	
					柵		壁			
					身舎	廊	身舎	廊		
SB 050A・B	南北柵	N-4°-W	5×3	14.4×7.2 88×26	3.0 08	2.7 (9)	2.4 (8)	1.2 (4)	4面廊	
SB 052	南北柵?	N-1°-W	1(以上)×3	×6.6 (22)	2.4 (8)		2.2			
SB 053	南北柵	真北	2(以上)×3	×7.8	3.0 08	2.4 (8)	2.5	1.4	4面廊か	
SA 054	南北	N-3°W	4間(以上)	9.2以上		2.2+2.2+2.4 (8)	2.2+2.4 (8)			

第3表 建物・柵一覧

### C 地区の掘立柱建物を検討してみたい。

まず、比較対象を、平安時代末期から鎌倉時代の遺跡に限定することにする。該期の県内の代表的な遺跡としては、上市町神田遺跡・江上B遺跡・弓庄城跡、立山町若宮B遺跡がある。これらの遺跡で検出された建物の面積を示したのが第26図である。建物の規模は、大きく3群に区分できよう。面積が $100m^2$ 以上の大規模建物、 $50\sim 100m^2$ の中規模建物、 $10\sim 50m^2$ の小規模建物である。各遺跡の建物規模の特徴をみると、神田遺跡では大規模建物と小規模建物から成り、中規模建物がほとんどない。若宮B遺跡と弓庄城跡では、大・中・小の各規模のものがあり、特に弓庄城跡では中規模建物の面積的な規格性が非常に強いことがうかがえる。江上B遺跡では、中・小規模の建物が主体を占め、大規模建物がわずかに存在する。

じょうべのま遺跡C地区的建物のうち、面積の確認ができるのは、SB 050のみであるが、これは約 $104m^2$ の広さを有しており、一応大規模建物の範囲に入れることができる。

宮田進一氏は、大規模建物について、これを村落領主層の住居に、中・小規模のものについては、名主あるいは小百姓の住居と推定している。SB 050は、規模としては、村落領主層の住居に匹敵する大きさを有しているものである。

**遺跡の性格** これまで述べてきたことの要点を抽出すると以下のようなになる。

1) C・K地区の主要な存続期間は、12世紀中項から13世紀中項である。

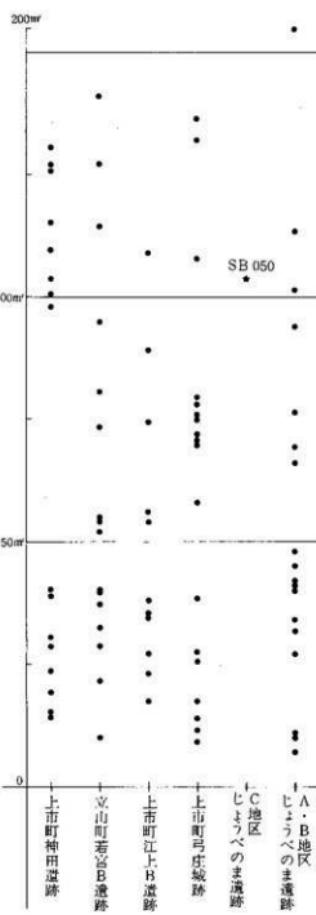
2) 部分的な発掘にとどまっているため、建物群の性格は、やや不明確であるが、公的な建物にみられる「コ」の字形の配列はとらないようである。

3) 建物は中世の建物としては比較的規模が大きい。

L地区の報告で高島・橋本両氏は、東大寺領入善庄との関連を示唆している〔高島他編1974〕。入善庄は、大治年間(1126

~1131)に立庄されており、平治元年(1159)の少し前に、洪水にあい、その後荒廃した状況が続いたものと考えられている〔奥山1977〕。立庄の時期は、考古学的な年代推定と大きな齟たりはない。洪水以後については、考古学的な状況と整合しない印象をあたえるが、これも庄園の荒廃の状況の程度がいまひとつ明確でない。時期的にはC・K・L地区の集落跡が、東大寺領入善庄の一画であった可能性は充分と認められよう。その場合、C地区の建物が、規模からみても庄園の管理者層の居住地であった可能性が強い。(山本正敏)

註① 建物が発掘区外にのびる可能性のあるものは、面積が確定しないので除いた。



第26図 平安時代～鎌倉時代の  
掘立柱建物面積

## 引用・参考文献

- ア 安念幹倫・高木場万里・山森伸正・林 浩明 1985 「富山県小矢部市桜町遺跡——産田地区発掘調査概報——」 小矢部市教育委員会
- ウ 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 貿易陶磁研究会
- 上野 章・狩野 隆・池野正男・富田進一・久々忠義 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 上野 章・樺本正春編 1983 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 上野 章・岸本雅敏・山本正敏・神保孝造・齊藤 隆 1984 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- オ 大田 弘 1977 「杉沢の植物」「杉沢の洪沢」 入善町教育委員会
- 岡上進一 1979 「境金剛遺跡」「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」 富山県教育委員会
- 奥田淳爾 1977 「入善庄の成立を示す新史料について」『黒部川扇状地』創刊号 黒部川扇状地地域社会研究所
- 小野正敏 1984 「第4回貿易陶磁研究集会・その成果と課題」『貿易陶磁研究』No.4 日本貿易陶磁研究会
- カ 齋藤良明 1982 「黒部川扇状地で米の収量が激増した要因」『黒部川扇状地』第6号 黒部川扇状地地域社会研究所
- キ 木越邦彦・藤井昭二 1965 「射水平野とその周辺の炭質物の絶対年代とその意義」『富山県放生津洞周辺の地学的研究II』
- 岸本雅敏 1976 「山岸遺跡」「日本考古学年報」27 日本考古学協会
- 岸本雅敏 1978 a 「第7回 山岸遺跡の山上・遺物」「富山県高岡市桜谷古墳群調査報告書」 富山県教育委員会
- 岸本雅敏 1978 b 「じょうべのま遺跡」「昭和52年度富山県埋蔵文化財調査一覧」 富山県教育委員会
- 岸本雅敏 1979 「じょうべのま遺跡」「昭和53年度富山県埋蔵文化財調査一覧」 富山県教育委員会
- 岸本雅敏 1981 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告——上市町遺構編——」 上市町教育委員会
- 岸本雅敏・山本正敏 1982 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」 入善町教育委員会
- 岸本雅敏 1982 a 「じょうべのま遺跡の製塙土器と一二三の問題」「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報(5)」 入善町教育委員会
- 岸本雅敏 1982 b 「東江上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告——上市町土器・石器編——」 上市町教育委員会
- 岸本雅敏 1983 「富山県における土器製塙の成立と展開」「北陸の考古学」 石川考古学研究会
- 岸本雅敏 1984 「じょうべのま遺跡の古代景観」「埋文とやまと」 第7号 富山県埋蔵文化財センター
- 岸本雅敏・間 清・山本正敏 1985 「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(3)」 富山県教育委員会
- 金田章裕 1978 「東大寺守屋庄の景観と開発」「古代の地方史4」 朝倉書店
- ク 久々忠義 1981 「辻坂の上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告——立山町遺構編——」 富山県教育委員会
- 久々忠義 1982 「辻坂の上遺跡」「北陸自動車道遺跡調査報告——立山町土器・石器編——」 富山県教育委員会
- 柳木謙周 1978 「八・九世紀における役務労働の実態について」『日本史研究』185 日本史研究会
- ケ 建設省北陸地方建設局編 1979 「下新川海岸侵食の歴史」
- サ 齋藤道保 1975 「富山県永見市丸岐製塙遺跡調査報告書」 永見市教育委員会
- 酒井豊洋 1978 「館の城跡」「天香守跡」「日本考古学年報」29 日本考古学協会
- 桜井隆夫 1983 「山田遺跡」「黒部市埋蔵文化財分布調査報告I」 黒部市教育委員会
- シ 神保孝造・奥村吉信 1981 「入善町じょうべのま遺跡予備調査概要(4)」 入善町教育委員会
- セ 間 清・久々忠義 1984 「都市計画街路七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(2)」 富山県教育委員会
- タ 高島忠平・樺本 正・舟崎久雄編 1974 「富山県埋蔵文化財調査報告書III 入善町じょうべのま遺跡」 富山県教育委員会
- 竹内俊一 1971 「じょうべのま」 入善町教育委員会
- ナ 中山正民 1981 「扇状地地形論考」「黒部川扇状地」第5号 黒部川扇状地地域社会研究所

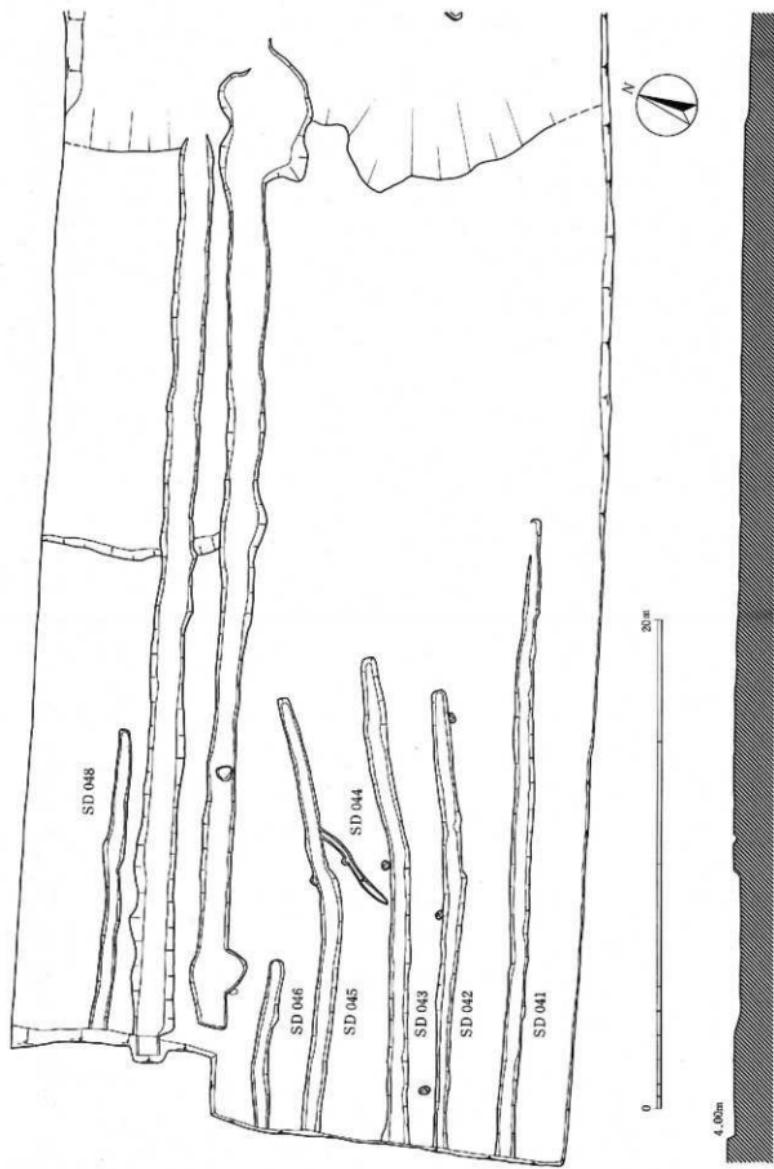
- ナ 奈良国立文化財研究所 1962 「平城宮発掘調査報告II」  
 奈良国立文化財研究所 1976 「平城宮発掘調査報告VII」
- ニ 日本貿易陶磁研究会編 1981 「貿易陶磁研究」No.1  
 日本貿易陶磁研究会編 1982 「貿易陶磁研究」No.2  
 日本貿易陶磁研究会編 1983 「貿易陶磁研究」No.3  
 日本貿易陶磁研究会編 1984 「貿易陶磁研究」No.4  
 入善町誌編纂委員会編 1967 「入善町誌」
- ヌ 沼田啓太郎 1953 「土師尖底器の考察」『石川考古学研究会々誌』第5号 石川考古学研究会
- ハ 橋本澄夫 1981 「内浦町の土器製塙遺跡と製塙土器」『内浦町史』第1巻 内浦町  
 橋本 正 1974 「第2章 土器(し地区) 1 中国製陶・磁器」および「第II章 土器の編年 第3節 陶磁器、土器類の年代」『富山県埋蔵文化財調査報告書田人善町じょうべのま遺跡』富山県教育委員会  
 橋本 正・岸本雅敏・山本正敏 1975 「富山県朝日町柳田遺跡、柳田古墳緊急発掘調査概報」富山県教育委員会  
 橋本 正・岸本雅敏 1976 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)」入善町教育委員会  
 橋本久和 1984 「高槻市上牧・宮田遺跡出土の中国陶磁」『貿易陶磁研究』No.4 日本貿易陶磁研究会  
 橋本正春・松島吉信 1984 「北陸自動車道遺跡調査報告——朝日町編——道下遺跡」富山県教育委員会  
 橋本正春 1984 「中世建物のあり方について」『北陸自動車道遺跡調査報告——立山町木製品・総括編—』富山県教育委員会  
 橋本正春 1985 「試掘調査報告」『北陸自動車道遺跡調査報告——朝日町編2···』富山県教育委員会
- ヒ 水見高校歴史クラブ 1964 「九段遺跡(くでんせいせき)」『富山県水見地方考古遺跡と遺物』富山県立水見高校歴史クラブ
- Hirooka 1971 「Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in South west Japan」『Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral.』38
- 広岡公夫 1977 「考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向」『第四紀研究』第15巻
- フ 深井三郎 1966 「黒部川扇状地の微地形とその形成」『黒部川』古今書院  
 深井三郎 1977 「黒部川扇状地の地形・地質と杉沢の形成」『杉沢の沢スギ』入善町教育委員会  
 藤井昭二 1965 「黒部川扇状地の形成と富山湾周辺の埋没林について」『地球科学』第78号  
 藤井昭二 1982 「小泉遺跡の埋没林の意義」「小泉遺跡」大門町教育委員会  
 藤井昭二他 1983 「入善町古原沖海底林調査報告書」入善町教育委員会  
 舟崎久雄 1983 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要」入善町教育委員会  
 舟崎久雄 1985 「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(6)」入善町教育委員会
- マ 間坂儀三郎 1966 「放生津河岸の牧野地区古代遺跡」『放生津河周辺の地質的研究 第3集』富山地学会  
 松島吉信 1983 「入善町じょうべのま遺跡予備調査概要(6)」入善町教育委員会  
 松島吉信 1985 「境A遺跡」『昭和59年度富山県埋蔵文化財調査一覧』富山県教育委員会  

ミ 宮田進一 1984 「D 中世の遺跡の性格」『北陸自動車道遺跡調査報告——上市町木製品・総括編——』上市町教育委員会

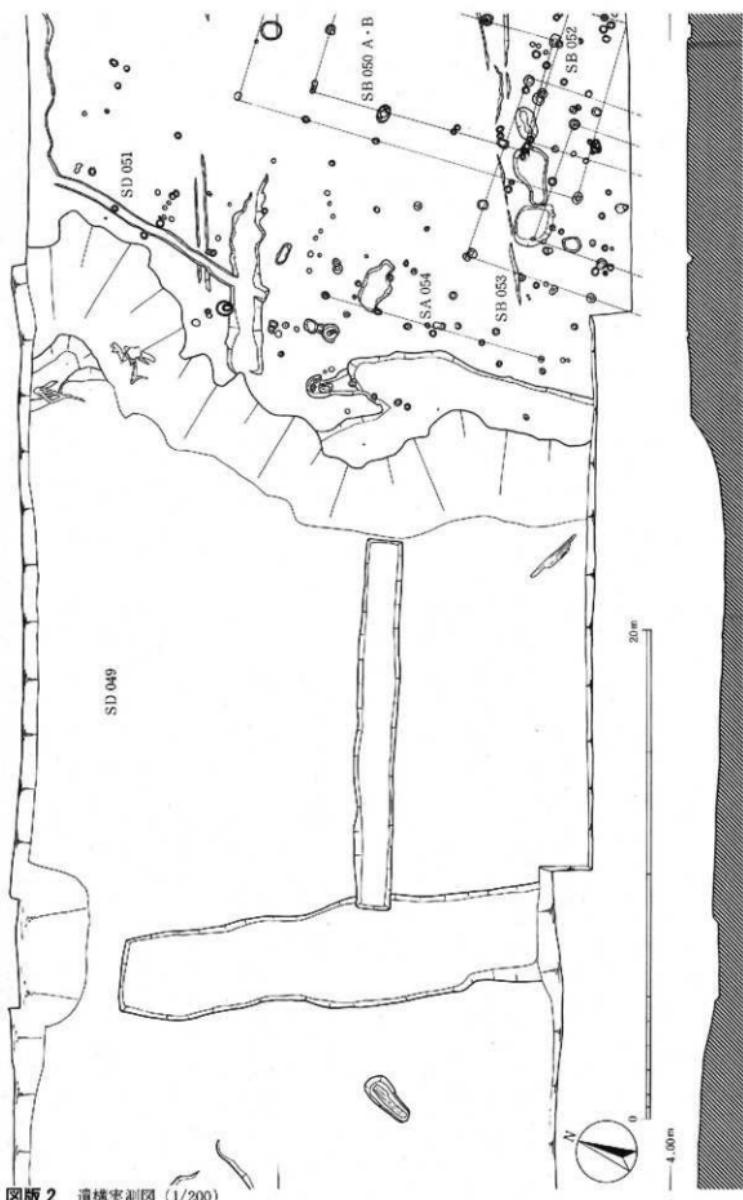
ヤ 山田時夫・谷井文夫・竹村利夫 1978 「黒部川扇状地における海岸侵食」『黒部川扇状地』第2号 黒部川扇状地地域社会研究所

ヨ 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館  
 吉岡康暢 1967 「北陸における土器の編年」『考古学ジャーナル』第6号 ニューサイエンス社  
 吉岡康暢 1981 「中世陶器の生産と流通」『考古学研究』第27卷第4号 考古学研究会  
 吉岡康暢 1983 a 「珠洲系陶器の層年代基準資料」『北陸の考古学』石川考古学研究会  
 吉岡康暢 1983 b 「第六章 北陸初期庄園遺跡の考古学的検討」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会、石川考古学研究会  
 吉川虎雄 1952 「黒部川扇状地の地形とその海岸侵食」『東京大学地理学研究』2

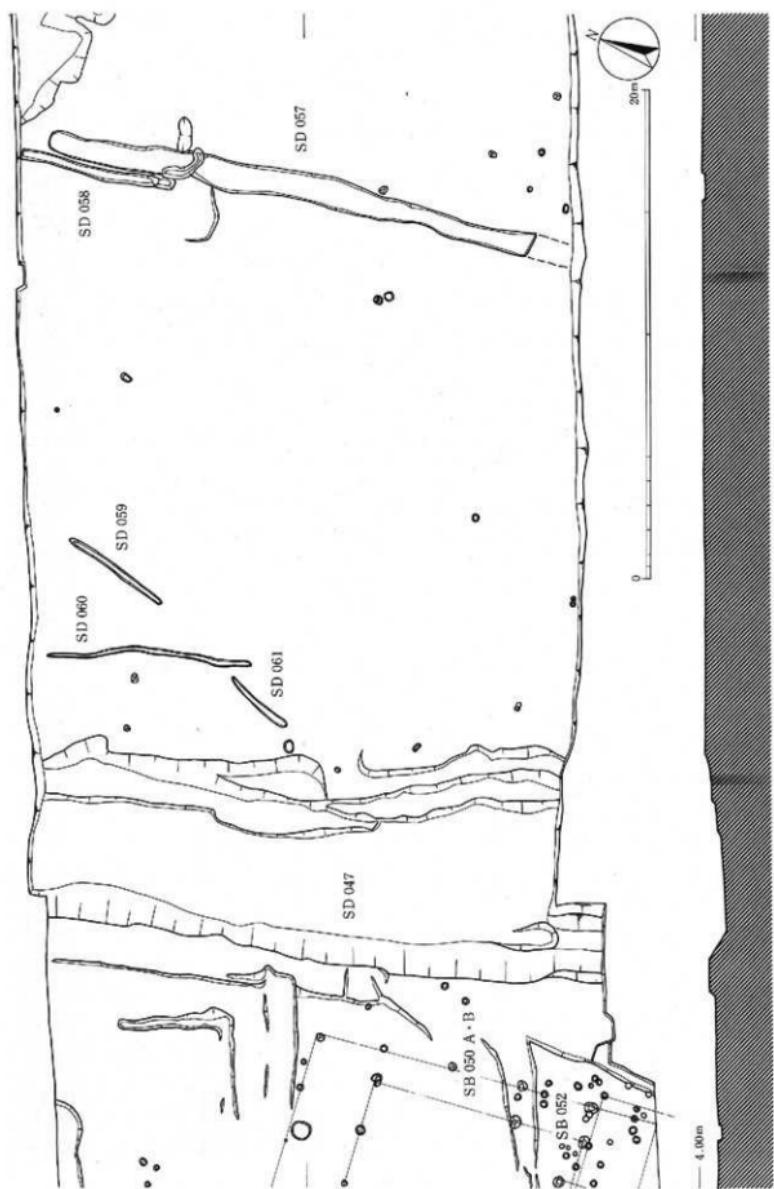
# 図 版



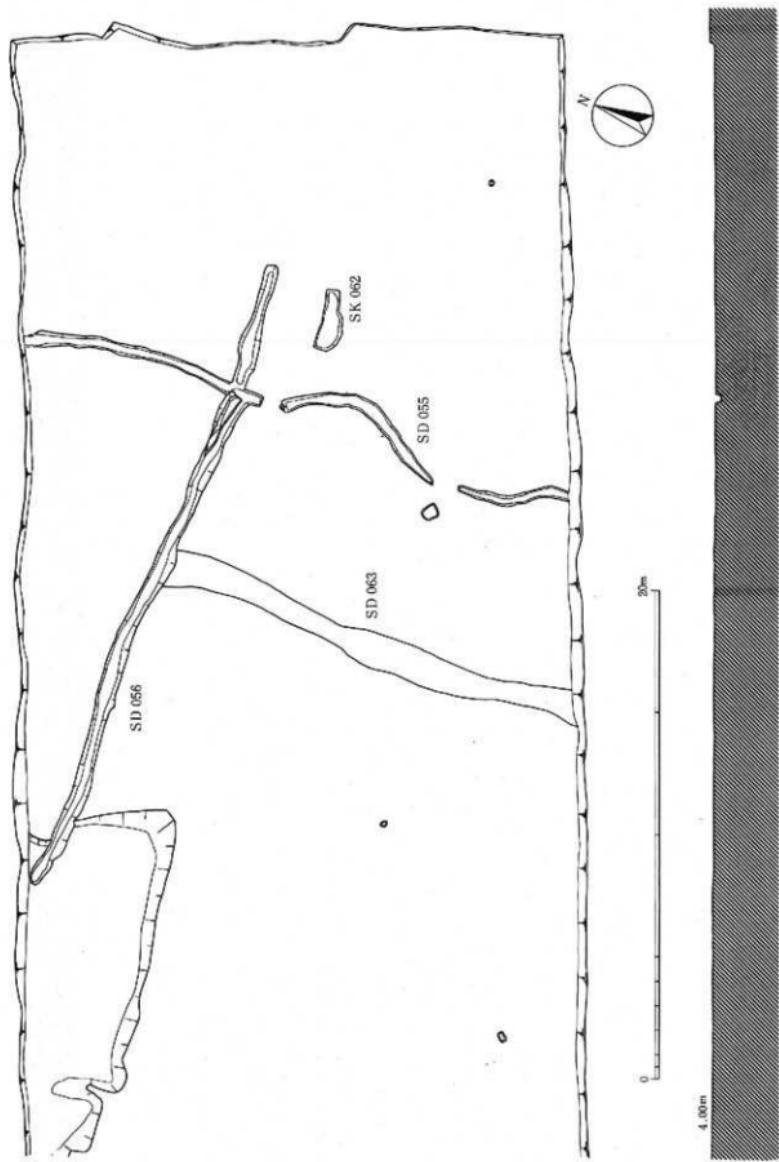
図版1 遺構実測図 (1/200)



図版2 遺構実測図 (1/200)



図版 3 遺構実測図 (1/200)



図版4 造構実測図

図版 5



C地区全景 東から

1



C地区トレンチ 西から

2

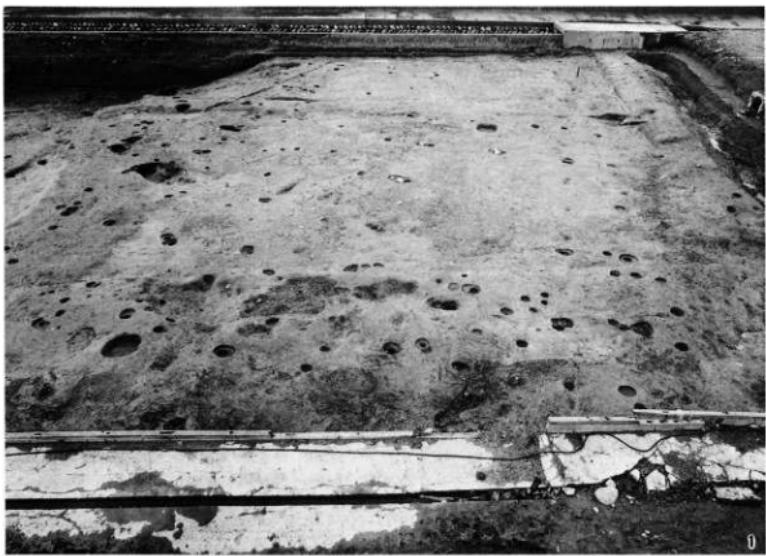
図版 6



C地区全景 西から



C地区溝SD 041~048 東から



C 地区掘立柱建物群 南から



C 地区掘立柱建物群 東から

図版 8



C 地区川跡SD 049 南から



C 地区川跡SD 049 南から

図版 9



K地区全景 東から



K地区全景 西から

図版10

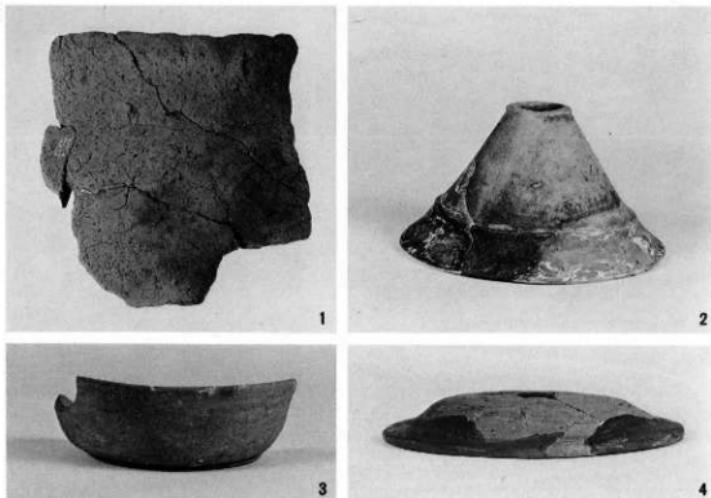


K地区溝SD 060 北から



C地区全景 東から

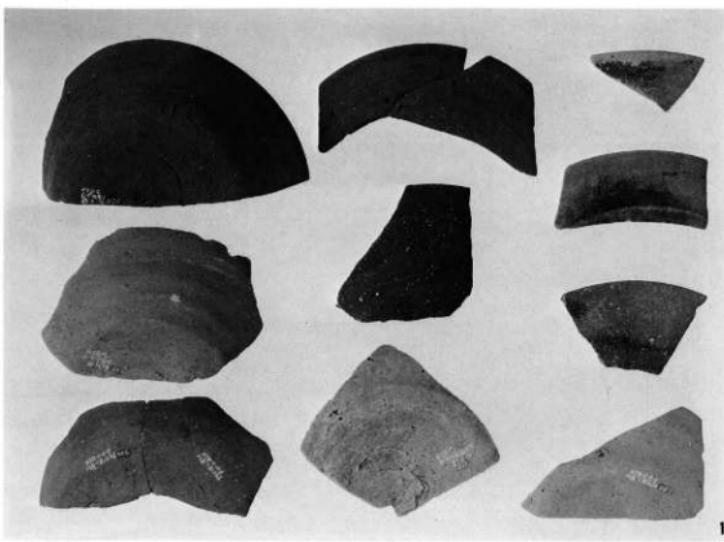
圖版11



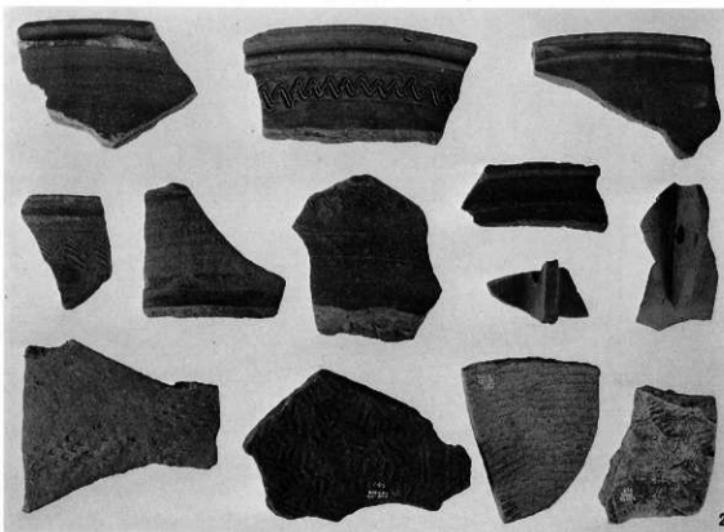
土師器・須恵器



須恵器

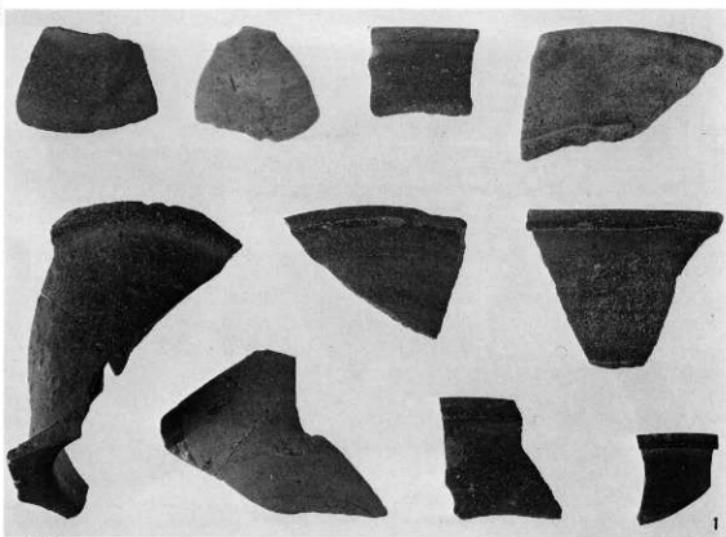


須惠器

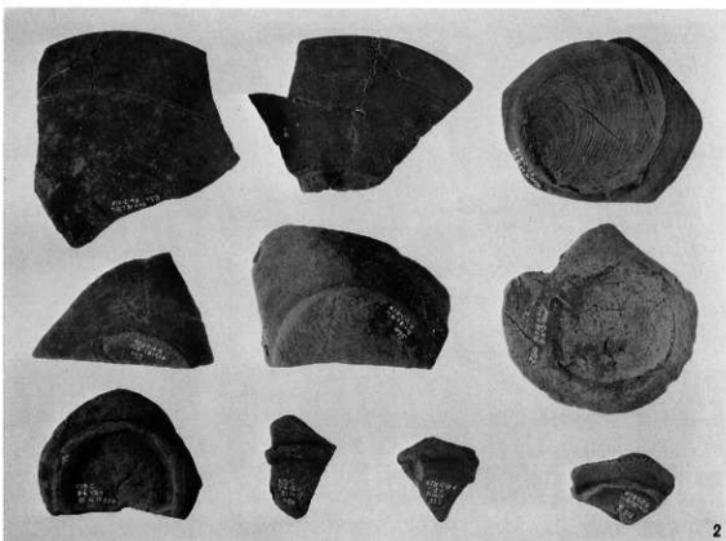


須惠器

圖版13



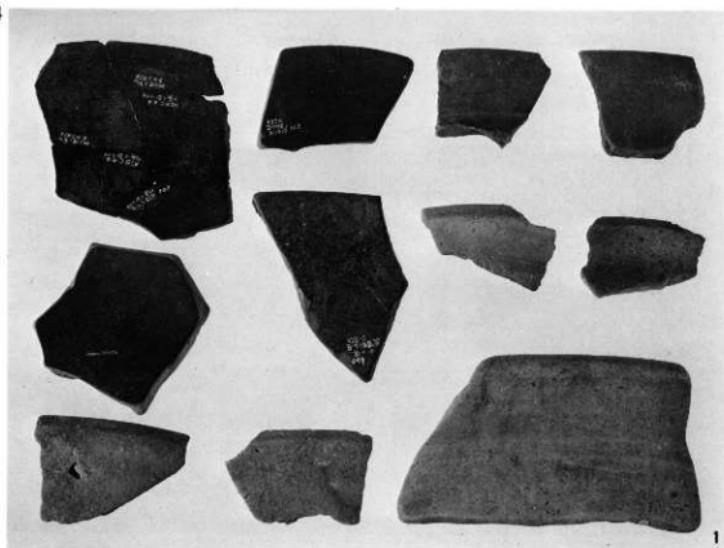
須惠器



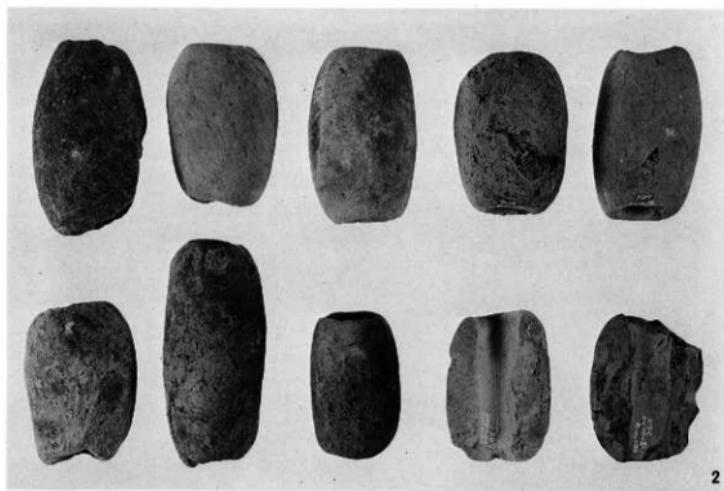
土師器

2

图版14

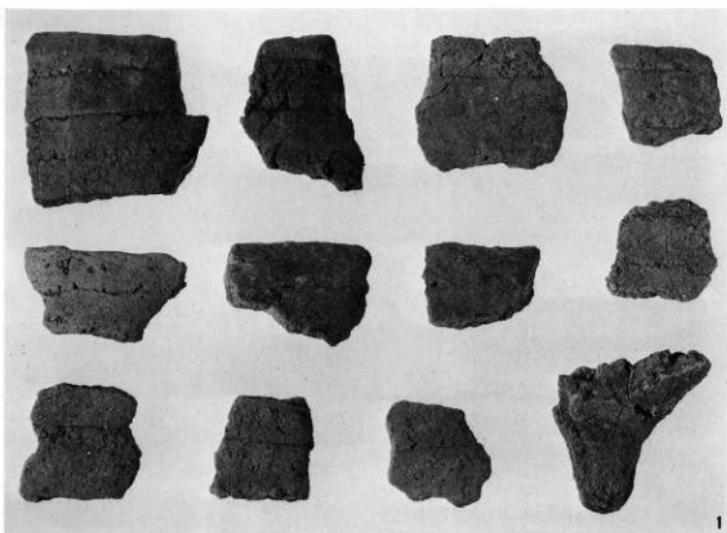


黑色土器



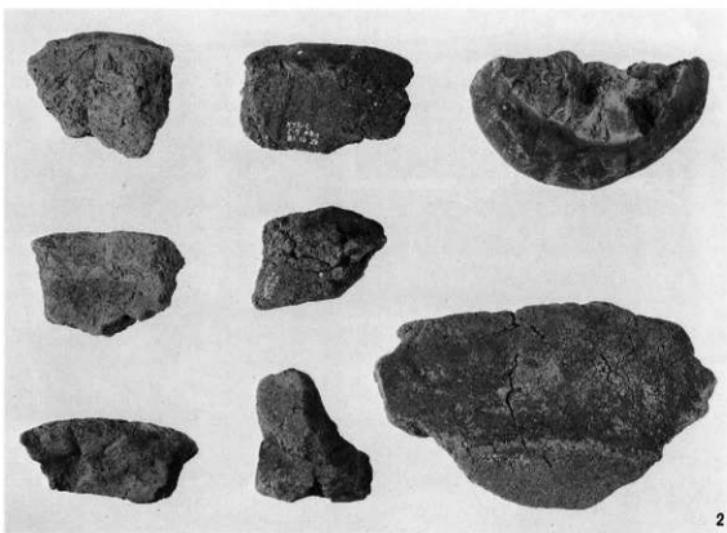
土 线

2



1

棒狀尖底製塙土器



2

平底製塙土器・土製支脚



1



2



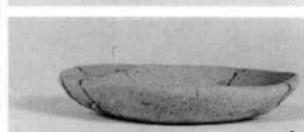
3



4



5



6



7



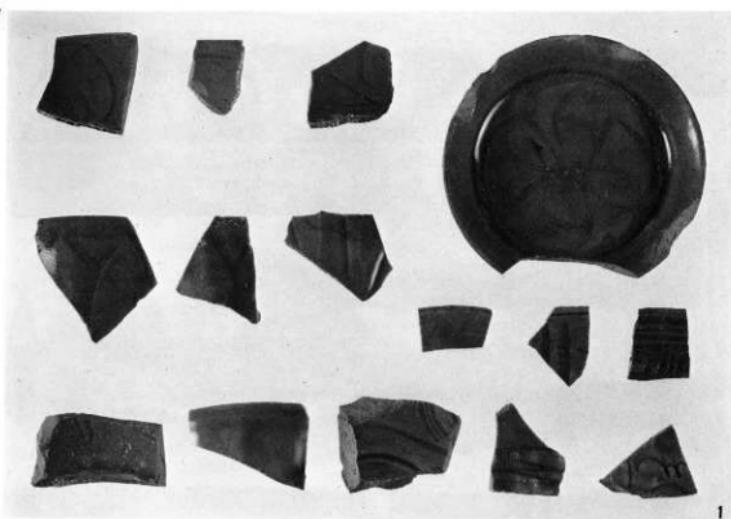
8



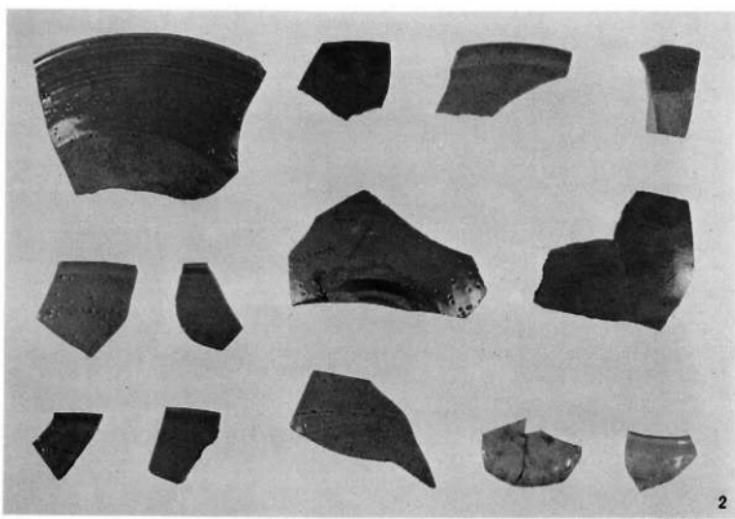
9

·株洲系陶器·土師質土器

圖版17

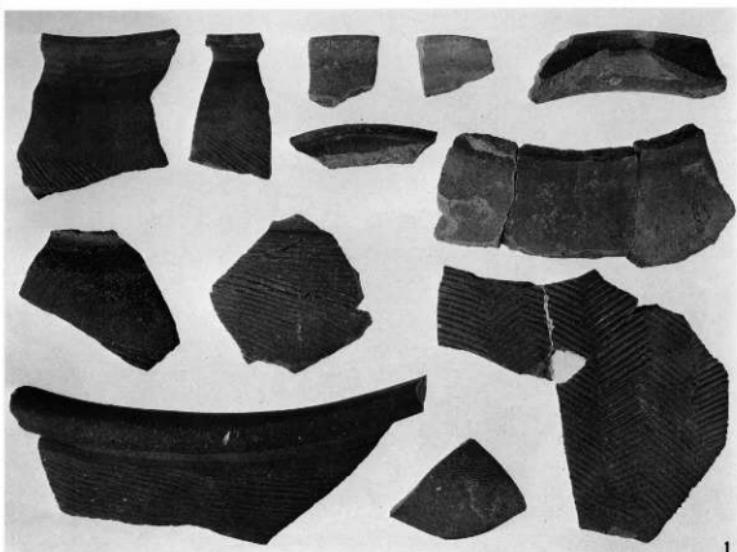


中国製磁器



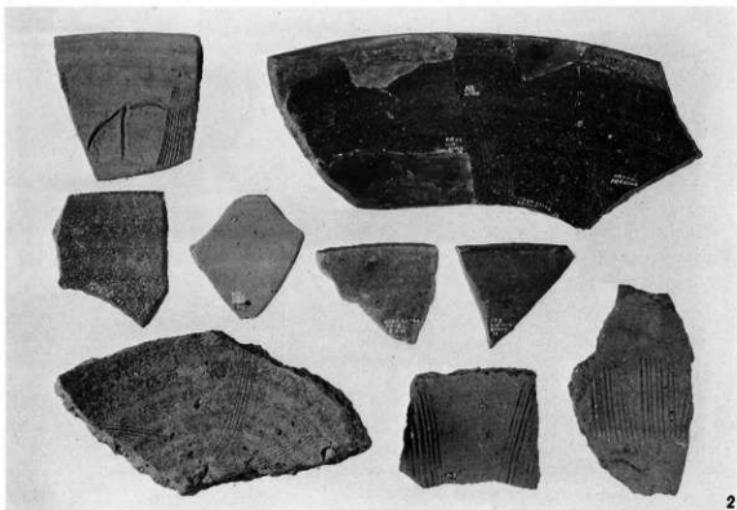
中国製磁器

图版18



1

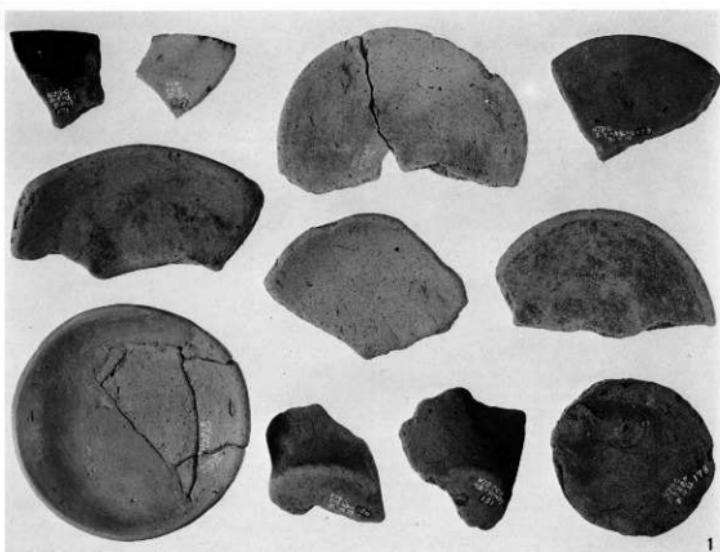
株洲系陶器 裳



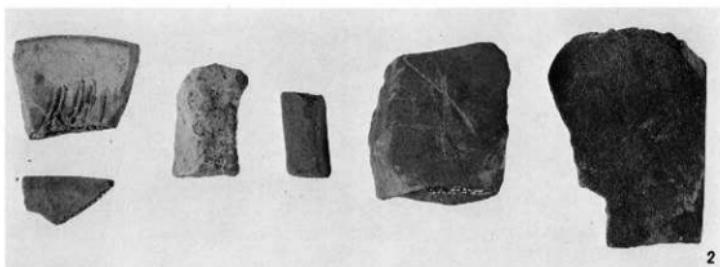
2

株洲系陶器 林

圖版19

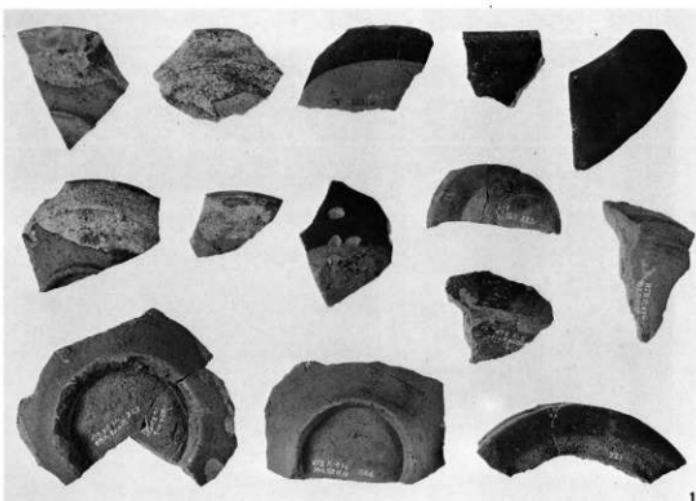


土師質土器

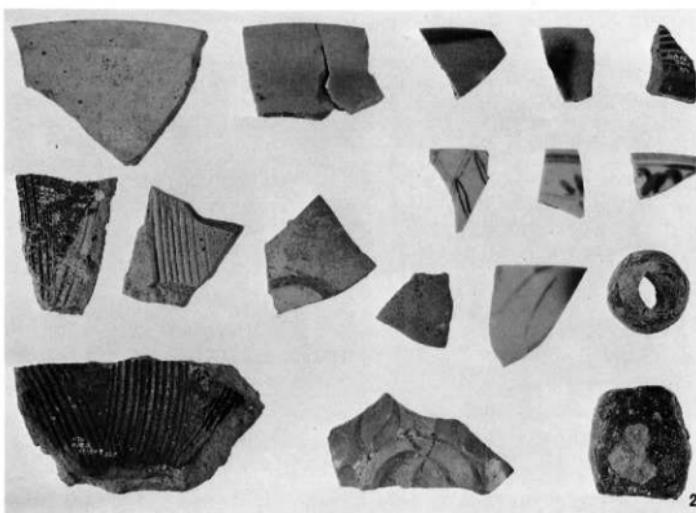


瀬戸・砥石

图版20



近世陶磁器



近世陶磁器

図版21



1



2



3



4

木製品

## じょうべのま遺跡

—C・K地区の調査—

---

昭和60年3月30日発行

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 入善町教育委員会

富山県下新川郡入善町入膳3255

TEL (0765) 72-1100

印刷 有限会社 日本海印刷

---

